倉吉市文化財調査報告書　第104集

鳥取大学附属図書館
郷土資料室

クズマ遺跡第2次発掘調査報告書

平成11年度

倉吉市教育委員会

2
1)

倉吉市文化財調査報告書　第104集

クズマ遺跡第2次発掘調査報告書

遺跡略号　4DKK・2

平成11年度

倉吉市教育委員会

<10>0100572858

序

この報告書は、平成11年度に個人の農地造成に伴い、倉吉市上神字クズマにおいて実施した埋蔵文化財の発掘調査の記録であります。

鳥取県の中部に位置する倉吉市は、数多くの優れた文化財を伝えています。その中でも、本遺跡の所在する上神地区は、数多くの遺跡とともに、出土品が国の重要文化財に指定された谷畑遺跡など、祭祀遺跡が密集することで注目されています。

今回の調査地は上神古墳群の中に位置し、丘陵上の古墳の他に、狭い調査範囲ながらも、竪穴式住居・掘立柱建物・溝状遺構など多数の遺構が確認されました。古墳からは多量の土器とともに土製動物形などの祭祀遺物が出土し、上神地区の特色である祭祀遺跡に新たな一例を加えることができました。

この報告書が文化財の理解・活用のための一資料としてお役に立てれば幸いに存じます。

最後になりましたが、調査にご協力いただいた土地所有者の山崎彰子氏・工事施工者の駒井商店、ならびに関係各位に対し深く感謝の意を表するものです。

平成12年３月

倉吉市教育委員会
教育長　足 羽 一 昭

例　　言

1　本報告書は、個人の農地造成に伴う事前調査として、平成11年度に倉吉市教育委員会が国・県の補助を受け倉吉市上神字クズマ1116-2において実施した発掘調査の記録である。

2　発掘調査団は次のような組織・編成である。

団　　長　足羽　一昭（倉吉市教育委員会教育長）

調査委員　名越　　勉（倉吉市文化財保護審議会会長）

調　査　員　根鈴　輝雄（倉吉博物館主任学芸員）　森下　哲哉（文化財係主任）

根鈴智津子（文化財係主事）　加藤　誠司（文化財係主事）

岡本　智則（文化財係主事）　岡平　拓也（文化財係主事）

調査補助員　山根　雅美・松田　恵子

事　務　局　波田野頌二郎（教育次長）

眞田　廣幸（文化課課長）　藤井　　晃（文化財係係長）

藤井　敬子（文化財係主任）　山﨑　昌子（文化財係主事）

金田　朋子（臨時職員）

内務整理　泉　美智子・世浪由美子・妻藤　君江・松嶋あつ子・竹歳　暁子・山本　錦

3　現場の調査・写真撮影は岡平が行った。

4　図面整理は岡平・山根・松田が、遺物整理は岡平・泉・世浪・妻藤・松嶋・竹歳・山本が行った。遺物実測は岡平・森下・根鈴・加藤・岡本・山根が行った。遺物写真撮影は岡平が行い加藤が補佐した。浄書は泉・世浪・妻藤が行った。

5　遺構測量のための基準点測量を中央技研株式会社に委託した。

6　本書の執筆は各調査員が討議し、第Ⅲ章　2　遺物は加藤が、土器観察表は岡平・岡本、その他は岡平が行った。編集は岡平・松田が行った。

7　第１図は、建設省国土地理院発行の１：25,000地形図「倉吉」の一部を複製・加筆したものである。第２図は、平成９年修正測量の１：2,500国土基本図「倉吉市平面図」を使用した。

8　挿図中の方位は国土座標第Ⅴ座標系の北を指す。

9　遺物に付した記号・番号は、本文・挿図・図版で統一している。

10　調査によって得られた資料は、倉吉博物館で保管している。

本　文　目　次

Ⅰ　発掘調査に至る経過 …… 1
Ⅱ　位置と歴史的環境 …… 1
Ⅲ　調査の概要 …… 2
　1　遺構 …… 6
　2　遺物 …… 20
Ⅳ　まとめ …… 34
報告書抄録

挿　図　目　次

第１図　周辺の地形と遺跡分布図 …… 3
第２図　クズマ遺跡２次調査区位置図 …… 4
第３図　クズマ遺跡２次遺構全体図 …… 5
第４図　１号墳調査前地形測量図 …… 6
第５図　１号墳遺構図 …… 7
第６図　奈良期甕・竈・土製支脚・土製模造品分布状況図 …… 10
第７図　奈良期甕集中部平・断面図 …… 11
第８図　１号・２号住居、２号段状遺構遺構図 …… 12
第９図　１号掘立柱建物、１号・２号柵列遺構図 …… 13
第10図　１号・２号溝状遺構遺構図 …… 15
第11図　１号段状遺構、１号貯蔵穴、１号・３号・４号土壙遺構図 …… 17
第12図　２号土壙遺構図 …… 18
第13図　土器溜断面図 …… 19
第14図　祭祀遺物 …… 21
第15図　１号墳周溝上層出土遺物１ …… 23
第16図　１号墳周溝上層出土遺物２ …… 25
第17図　１号墳周溝下層出土遺物１ …… 26
第18図　１号墳周溝下層出土遺物２ …… 27
第19図　２号住居、１号掘立柱建物、１号・２号柵列出土遺物 …… 29
第20図　１号・２号溝状遺構、１号段状遺構出土遺物 …… 31
第21図　１号貯蔵穴・１号土壙・土器溜、遺構外出土遺物 …… 32
第22図　鉄製品・玉類・石製品 …… 33

図　版　目　次

図版１　遺跡　調査前全景　調査後全景
図版２　遺構　１号墳　１号墳周辺
図版３　遺構　奈良期甕集中部
図版４　遺構　不明土製品出土状況　土製馬形出土状況　土製馬形・猪形出土状況
図版５　遺構　土製紡錘車出土状況　１号墳北断面　調査区北壁
図版６　遺構　１号住居　２号住居　２号住居貼床
図版７　遺構　１号掘立柱建物、１号・２号柵列　１号住居・２号柵列検出面　２号柵列Ｐ５・Ｐ６断面
図版８　遺構　１号・２号溝状遺構検出面　１号・２号溝状遺構完掘
図版９　遺構　１号・２号溝状遺構断面　１号・２号溝状遺構Ｐ３・Ｐ４・Ｐ５断面
図版10　遺構　３号溝状遺構断面　１号段状遺構　１号段状遺構断面
図版11　遺構　１号貯蔵穴　１号土壙
図版12　遺構　２号土壙　２号土壙断面　３号土壙半裁
図版13　遺構　４号土壙　土器溜
図版14　遺物　土器
図版15　遺物　土器
図版16　遺物　土器
図版17　遺物　土器
図版18　遺物　土器
図版19　遺物　土器
図版20　遺物　土器
図版21　遺物　土器・玉類・鉄製品
図版22　遺物　石製品

Ⅰ　発掘調査に至る経過

平成10年９月、鳥取県文化財保護指導委員川本充氏より、倉吉市教育委員会文化課に倉吉市上神字クズマ1116-2で立木の伐採が行われているとの連絡があった。ただちに現地を確認し、開発業者に確認を取ったところ、土地所有者山崎彰子氏に依頼を受け農地造成工事を行うとのことであった。現地は周知の遺跡である上神古墳群の中に位置し、開発予定地内にも古墳状の高まりが認められたため、土地所有者及び開発業者と協議を行った。現地は松林で、病害虫などにより立木が枯れたため農地として再利用する予定であり、現状のままでは丘陵及び斜面のため農作業の効率が悪く、是非とも丘陵を削平して農地造成を行いたいとのことであった。そこで発掘調査が終了するまで開発を中断し、平成11年度に倉吉市教育委員会が国・県の補助を受け発掘調査を行うこととなった。現地調査は平成11年５月26日から平成11年11月15日まで行い、調査面積は570㎡であった。

Ⅱ　位置と歴史的環境

クズマ遺跡は、倉吉市街地から北西に約４㎞離れた倉吉市上神字クズマに所在する。調査地は倉吉市と北条町との境にある蜘蛛ヶ家山（標高177.1m）から南西に樹枝状に派生した丘陵のほぼ末端部、北西から南東に谷筋に突き出した丘陵尾根筋から南斜面部分である。標高は37～42mで、付近の水田面との標高差は約20mである。１次調査(21)の調査地は今回の調査地から南に浅い谷を隔てて約100m離れている。１次調査は昭和60年に行われ、弥生時代後期から古墳時代前期の竪穴式住居30棟と古墳時代後期の円墳９基が調査されている。そのなかで、６世紀中頃に築造された古墳の周溝上面から７世紀後半の土器と共に土製人形１点・土製馬形12点の他、手捏土器・竈・土製支脚・甕などが出土している。また、２次調査地から南東に約170m離れた同一丘陵先端部には217点にも及ぶ土製人形・馬形などが採取されたイガミ松遺跡(22)が所在する。

蜘蛛ヶ家山と四王寺山に挟まれた上神地区周辺は、倉吉市でも有数の遺跡が密集する地域である。上神51号墳(19)墳丘盛土で細石刃石核が出土するなど、その始まりは旧石器時代に及ぶことが明らかになっている。縄文時代では、取木遺跡(29)の竪穴式住居・平地式住居と焼石群、イキス遺跡(28)の落し穴などが、弥生時代前期ではイキス遺跡の土壙墓群が知られる。弥生時代中期では、西前遺跡Ａ地区(49)で竪穴式住居が確認されている他、蜘蛛ヶ家山の東側にある北条町米里では銅鐸が出土している(51)。弥生時代後期以降、それまでに比べ遺跡の数は増加する。集落としてはクズマ遺跡１次・桜木遺跡(25)・上神宮ノ前遺跡(26)・夏谷遺跡(55)が、墳丘墓は四隅突出型墳丘墓の可能性がある柴栗古墳群(41)内の墳丘墓・墳丘に貼石をもつ可能性のある三度舞墳丘墓(42)が知られる。

古墳時代では、集落はクズマ遺跡１次・桜木遺跡・西山遺跡(23)・猫山遺跡(39)・西前遺跡(49・50)・夏谷遺跡などが調査されている。前期の古墳は、仿製の三角縁神獣鏡・変形六獣鏡・碧玉製鍬形石・滑石製琴柱形石製品が出土した上神大将塚古墳（40・円墳・直径30m)、大谷大将塚古墳（44・前方後円墳・全長50m）がある。また、カスガイ状の周溝を持つ方墳群が猫山遺跡・中峰古墳群(57)で確認されている。古墳時代後期になると、調査地周辺の丘陵上に古墳群が形成される。クズマ遺跡の所在する蜘蛛ヶ家山を中心とした丘陵上にも、総数230基ともいわれる上神古墳群(15)をはじめ穂波古墳群(14)・原古墳群(１)・曲古墳群(３)・北尾古墳群(７)・島古墳群(８)などが知られている。また、沢ベリ遺跡(59)・イザ原古墳群(46)・小林古墳群(45)など、平野部に近い低丘陵上にも古墳群が形成されることが明らかになっている。調査地周辺の発掘調査例を見ると、東隣の丘陵上にある西山遺跡の古墳群は５世紀以降、クズマ遺跡１次調査地の古墳群は６世紀以降の造営であることが明らか

にされている。西山遺跡は、独立丘陵上に同じ時期の集落と古墳群が存在し、また、東隣の谷部分に存在する祭祀遺跡である谷畑遺跡(24)とあわせて６世紀代の生・死・祀りといった生活全般をうかがい知ることのできる遺跡群として注目される。終末期の古墳は、取木遺跡・一反半田遺跡(30)・両長谷遺跡(34)などで確認されている。

７世紀中頃創建の大御堂廃寺を始めとして、７世紀後半の大原廃寺、８世紀の石塚廃寺など当地方にも古代寺院が建立される。このうち、大御堂廃寺は銅製匙・非常に精巧な造形の銅製獣頭・多数の塼仏や塑像・160点以上の墨書土器など充実した遺物をもち、地方寺院としては珍しい観世音寺式と考えられる伽藍配置を取るなど本格的な古代寺院であったことが判明しつつある。また大原廃寺は、講堂を西側に寄せた変形の法起寺式伽藍配置をとり、一間四面堂に形を変えながら中世まで存続したことが判明している。

８世紀後半には、四王寺山の南側、通称久米ヶ原丘陵先端部の丘陵上に、伯耆国衙・伯耆国分寺・伯耆国分尼寺（法華寺畑遺跡）が隣接して造営される。これらの遺跡群から約400m北東の低丘陵上には伯耆国の物資収納施設である不入岡遺跡が存在する。

平安時代には、四王寺山山頂に四天王像を安置し修法を行ったとされる四王寺(36)が建立される。

古墳時代終末期から奈良・平安時代にかけての集落は西前遺跡・平ル林遺跡(60)などが知られている。また、クズマ遺跡から東に約650m離れた浅い谷部に古墳時代後期から奈良時代にかけて土器や祭祀遺物を廃棄したと考えられる上神宮ノ前遺跡が存在する。奈良・平安時代以降の墳墓はほとんど分かっていないが、長谷遺跡で横穴式石室を模した石槨内に土師器の蔵骨器２個を合葬した火葬墓が見つかっている。

Ⅲ　調査の概要

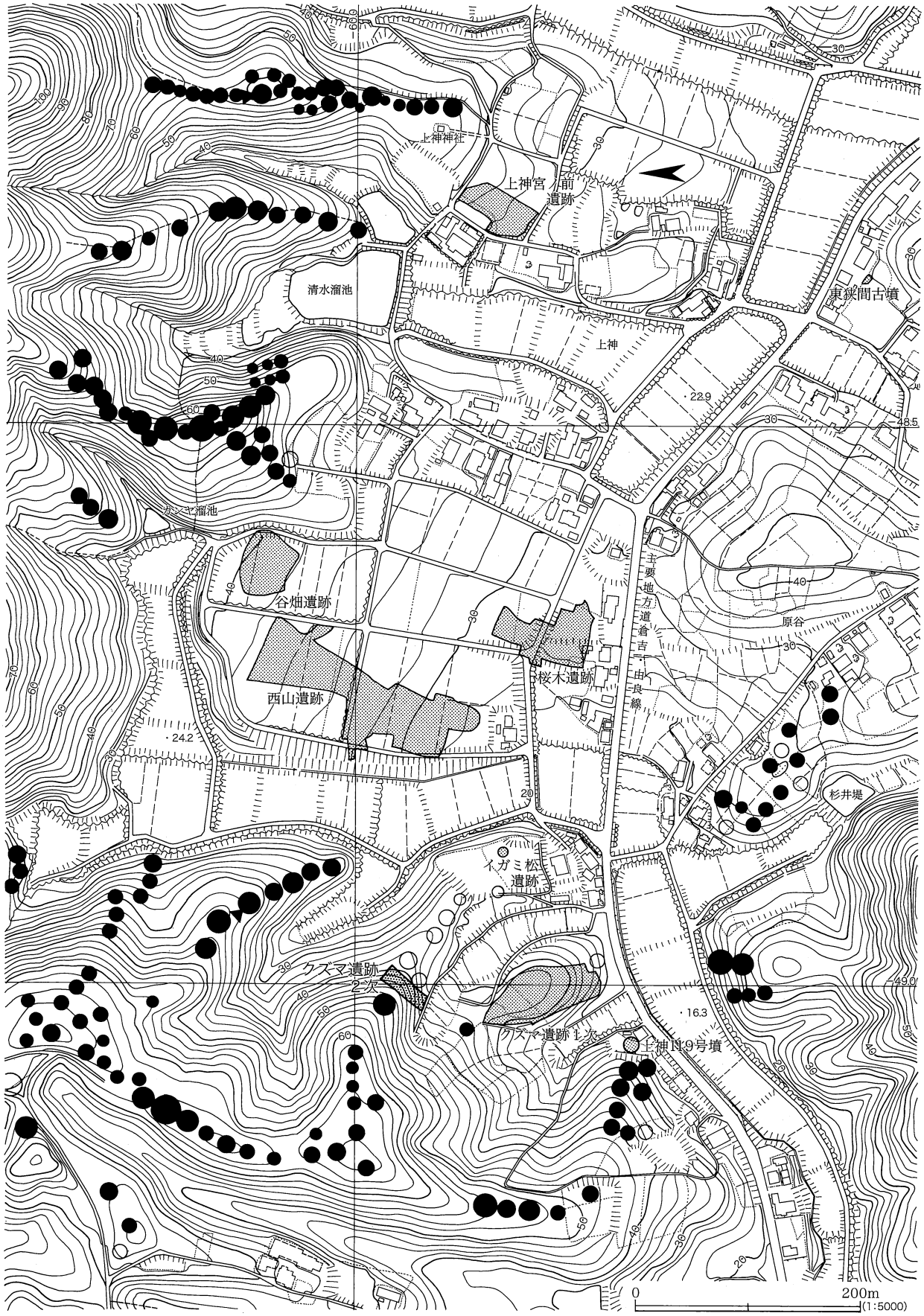
調査地の基本的な層序は、上からⅠ褐色土（表土)、Ⅱ茶褐色土、Ⅲ淡褐色粘質土（ソフトローム層)、Ⅳ黄褐色砂質土（ホーキ層)、Ⅴ橙褐色粘質土（礫混じり粘質土層)、Ⅵ′黄褐色土（Ⅵ層起源の土か。きめ細かく軟質)、Ⅵ黄褐色土（大山・倉吉軽石層)、Ⅶ白灰色粘質土である。Ⅰ・Ⅱ層は遺物包含層でⅢ層以下は地山であり、遺構検出は基本的にⅠ・Ⅱ層を掘り下げた後行った。調査地の地形は丘陵頂部から浅い谷部であるため、Ⅲ・Ⅳ層は丘陵頂部にわずかに存在するのみで、斜面部分での遺構検出面は主にⅤ層上面である。また、調査区南側の斜面部分にはⅡ層の下に同じく遺物包含層であるⅡ′茶褐色土（Ⅱ層よりもかなり硬い）が存在する。その下層には浅い谷地形が、大山上部火山灰であるクロボクに由来すると考えられる黒色土で埋没した様子が認められた。そのため、調査区南側はⅠ・Ⅱ層を掘り下げた時点、Ⅱ′層を掘り下げた黒色土の上面、黒色土を掘り下げたⅤ層上面の３回遺構検出を行った。

調査の結果、古墳１・竪穴式住居２・掘立柱建物１・柵列２・溝状遺構３・段状遺構２・貯蔵穴１・土壙４・土器溜１を検出した。

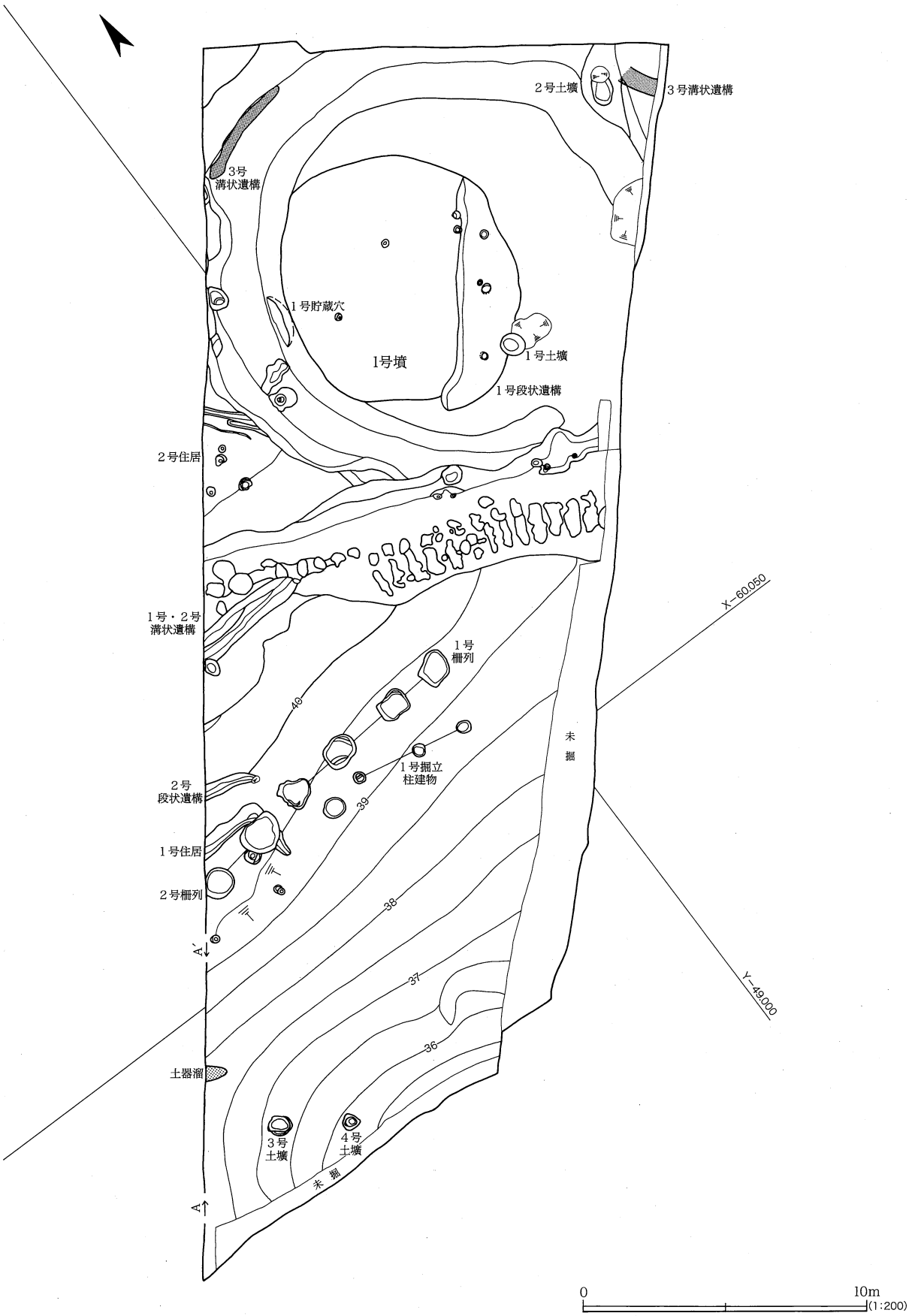
1	原古墳群	8	島古墳群	15	上神古墳群	22	イガミ松遺跡
2	曲管峯長谷遺跡	9	島苅山遺跡	16	上神44号墳	23	西山遺跡
3	曲古墳群	10	堤屋敷遺跡	17	上神45号墳	24	谷畑遺跡
4	曲宮ノ前遺跡	11	北尾遺跡	18	上神48号墳	25	桜木遺跡
5	曲第１遺跡	12	島遺跡	19	上神51号墳	26	上神宮ノ前遺跡
6	曲岩下遺跡	13	曲226号墳	20	上神119号墳	27	伯尾山窯跡
7	北尾古墳群	14	穂波古墳群	21	クズマ遺跡１次	28	イキス遺跡

第１図　周辺の地形と遺跡分布図

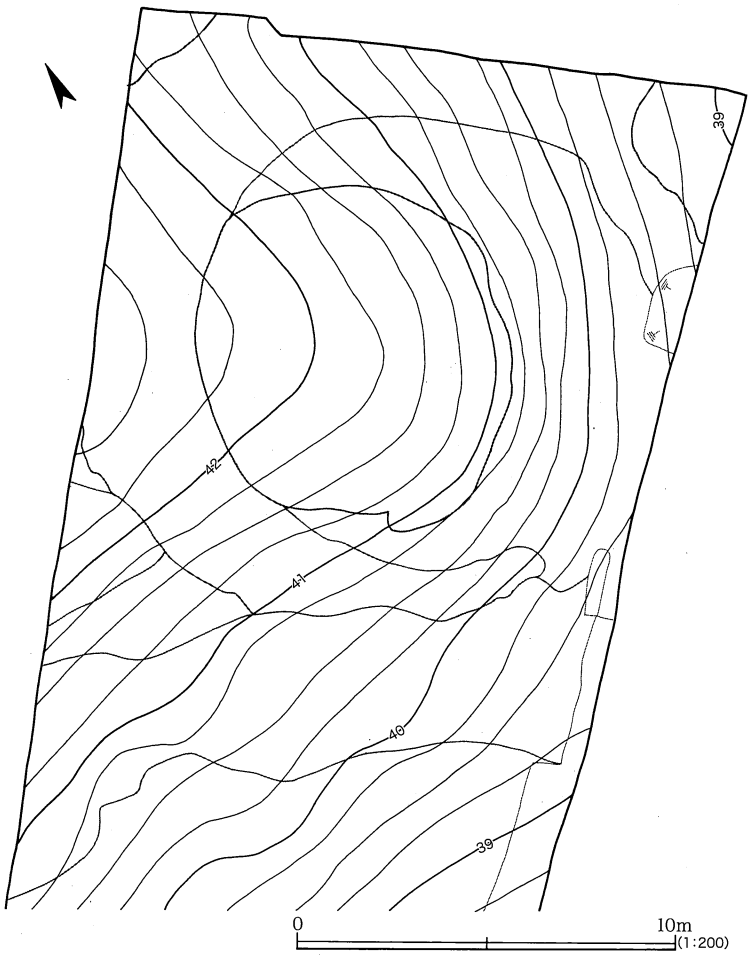
29	取木遺跡	37	大谷城跡	45	小林古墳群	53	屋喜山古墳群
30	一反半田遺跡	38	東狭間古墳	46	イザ原古墳群	54	屋喜山９号墳
31	コザンコウ遺跡Ａ地区	39	猫山遺跡	47	中尾遺跡１次	55	夏谷遺跡
32	コザンコウ遺跡Ｂ地区	40	上神大将塚古墳	48	トドロケ遺跡	56	和田城跡
33	道祖神峰遺跡	41	柴栗古墳群	49	西前遺跡Ａ地区	57	中峰古墳群
34	両長谷遺跡	42	三度舞墳丘墓	50	西前遺跡Ｂ地区	58	沢べり遺跡１次
35	古墳群	43	イザ原遺跡	51	米里銅鐸出土地	59	沢べり遺跡２次
36	四王寺跡	44	大谷大将塚古墳	52	若林遺跡	60	平ル林遺跡



第２図　クズマ遺跡２次調査区位置図



第３図　クズマ遺跡２次遺構全体図



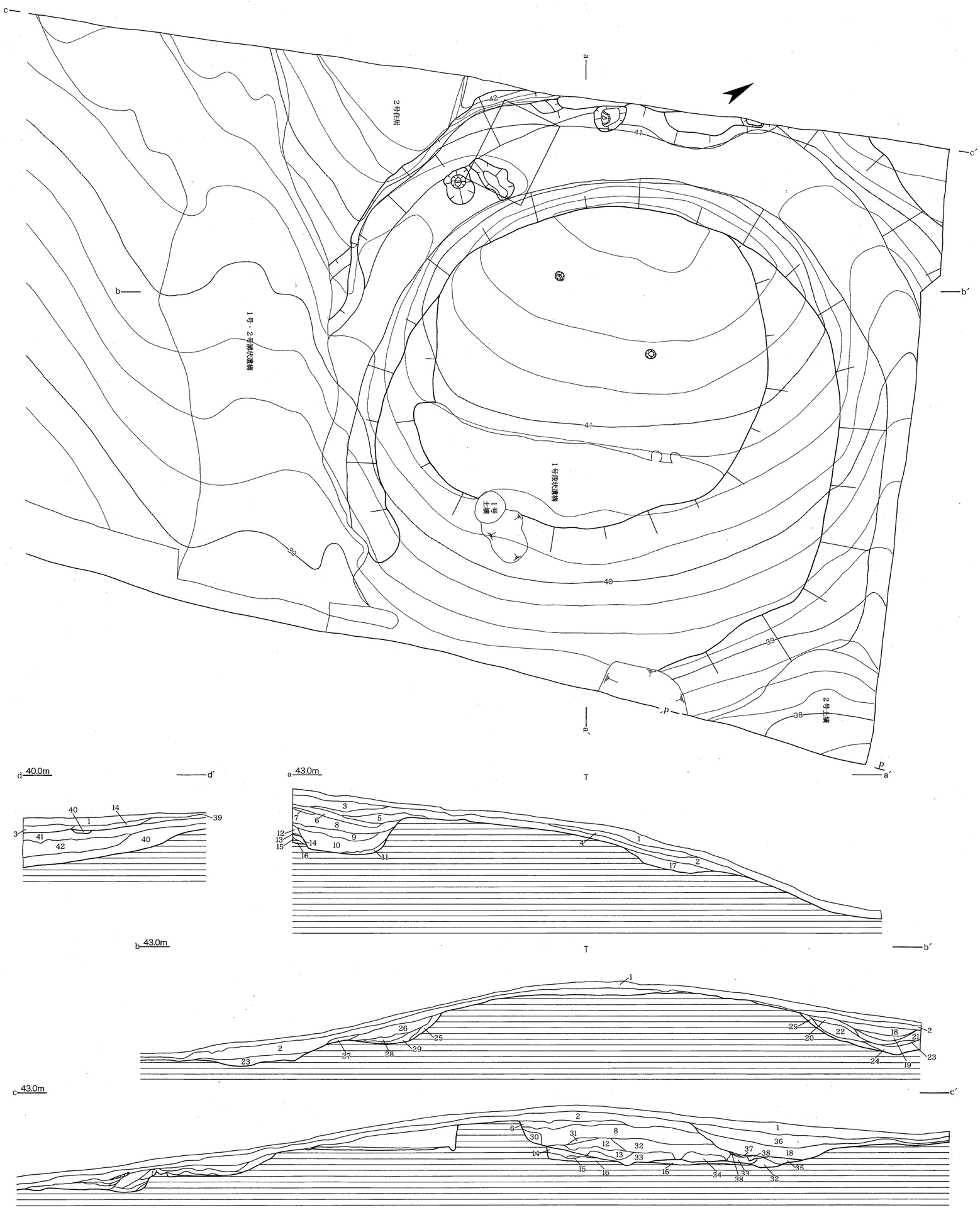
第４図　１号墳調査前地形測量図

１　遺構

１号墳　丘陵の尾根部分（標高42m）で検出した。南北の直径約14mの円墳である。西側・北側では、周溝が一部調査区外にかかる。他遺構との切り合いは、１号墳が西側にある２号住居・１号貯蔵穴、墳頂部東側にある１号段状遺構・１号土壙を切る。１号墳が東側にある２号土壙、南側の１号・２号溝状遺構、北側の３号溝状遺構に切られる。また、周溝西ベルトの土層断面（第５図ａ－ａ′）には、埋土中に１号墳の周溝の立ち上がりの線があり、調査区外に広がる何か別の遺構がある程度埋まった後に１号墳の周溝が掘削されたと考えられる。調査区西壁の断面には調査区外の別遺構の埋土（土層断面図中の14・15・16層）が幅5.3mにわたって確認できた。現段階で確定はできないが、１号墳の周溝と同じような深さがあること、踏査によると同じ丘陵上には古墳が連なって分布することなどから、古墳である可能性が高いと考えられる。

墳丘　墳丘は後世の削平により遺物包含層の直下はⅢ層以下の地山となり、墳丘盛土・主体部とも遺存していなかった。

周溝　周溝はほぼ全周するが、標高の低い側にあたる東側では、後世の削平のためか検出できなかった。周溝は残りの良い西側で幅が3.3～3.6m、検出面からの深さは最大0.93mを測り、底面はⅦ層まで及ぶ。断面形は南側と北側はＵ字形だが標高の高い西側では逆台形に近い。底面は基本的にほぼ平らで、調査区の西壁際の段状に掘り残されたような部分は、調査区外西側に広がる遺構の底面であると考えられる。周溝の西側で土壙を３基確認したが、掘り方の形態が不整であること、土壙内の埋土が周溝内の埋土と同一であること、遺物が特別集中して



第5図　1号墳遺構図

	1	表土
	2	茶褐色土（地山粒子・炭わずかに含む）
	3	黒褐色土
	4	暗黄褐色土（地山粒子多く含む）
粘質強くよくしまる	5	淡褐色土（炭粒含む）
	6	黒褐色土（ホーキ土粒わずかに含む、炭粒含む）
	7	暗褐色土（ホーキ土粒わずかに含む、炭粒含む）
	8	淡褐色土（ホーキ・レキ粘土・黄褐色土粒含む、炭粒含む）
	9	黒褐色土（ホーキ・レキ粘土・黄褐色土粒多く含む、炭粒含む）
	10	茶褐色土（ホーキ・レキ粘土ブロック含む、炭粒含む）
	11	明茶褐色土
	12	明茶褐色土（地山ブロック含む）
	13	暗褐色土（地山ブロック・炭含む）
	14	茶褐色土
	15	レキ粘土と茶褐色土との混ざり土
	16	茶褐色土（地山粒子を多く含む）
	17	2と同質だが2よりも暗い
	18	茶褐色土（非常にしまりなし）
	19	黄褐色土（地山粒子非常に多く含む）
	20	褐色土（やや硬い）
	21	淡茶褐色土（しまりなし）
	22	暗褐色土（炭含む）
	23	暗黄褐色土
	24	暗黄褐色土（23よりも暗い）
	25	暗褐色土と地山黄褐色土の混ざり土
	26	暗褐色土（地山粒子・炭含む）
	27	26より明るくしまりがない
	28	褐色土（地山粒子・炭含む、26よりややしまる）
	29	暗黄褐色土（炭含む）
	30	地山レキ粘土（わずかに黒褐色土を含む）
	31	11よりやや暗い
	32	茶褐色土（地山ブロック非常に多く含む、炭含む）
	33	地山ホーキ・レキ粘土（わずかに黒褐色土を含む）
	34	地山淡褐色粘質土・白灰色粘質土（わずかに黒褐色土を含む）
	35	20よりややしまりがない
	36	暗褐色土（しまりがなくボサボサ）
	37	黒褐色土（地山粒子多く含む、非常に硬化している）
	38	黒褐色土（地山粒子含む、硬い）
	39	暗褐色土
	40	明茶褐色土（地山粒子含む）
	41	暗褐色土（ややしまる）
	42	暗褐色土（粘質強くよくしまる）

0　5m
(1:100)

出土したわけではないことなどから、埋葬施設とは考えにくい。

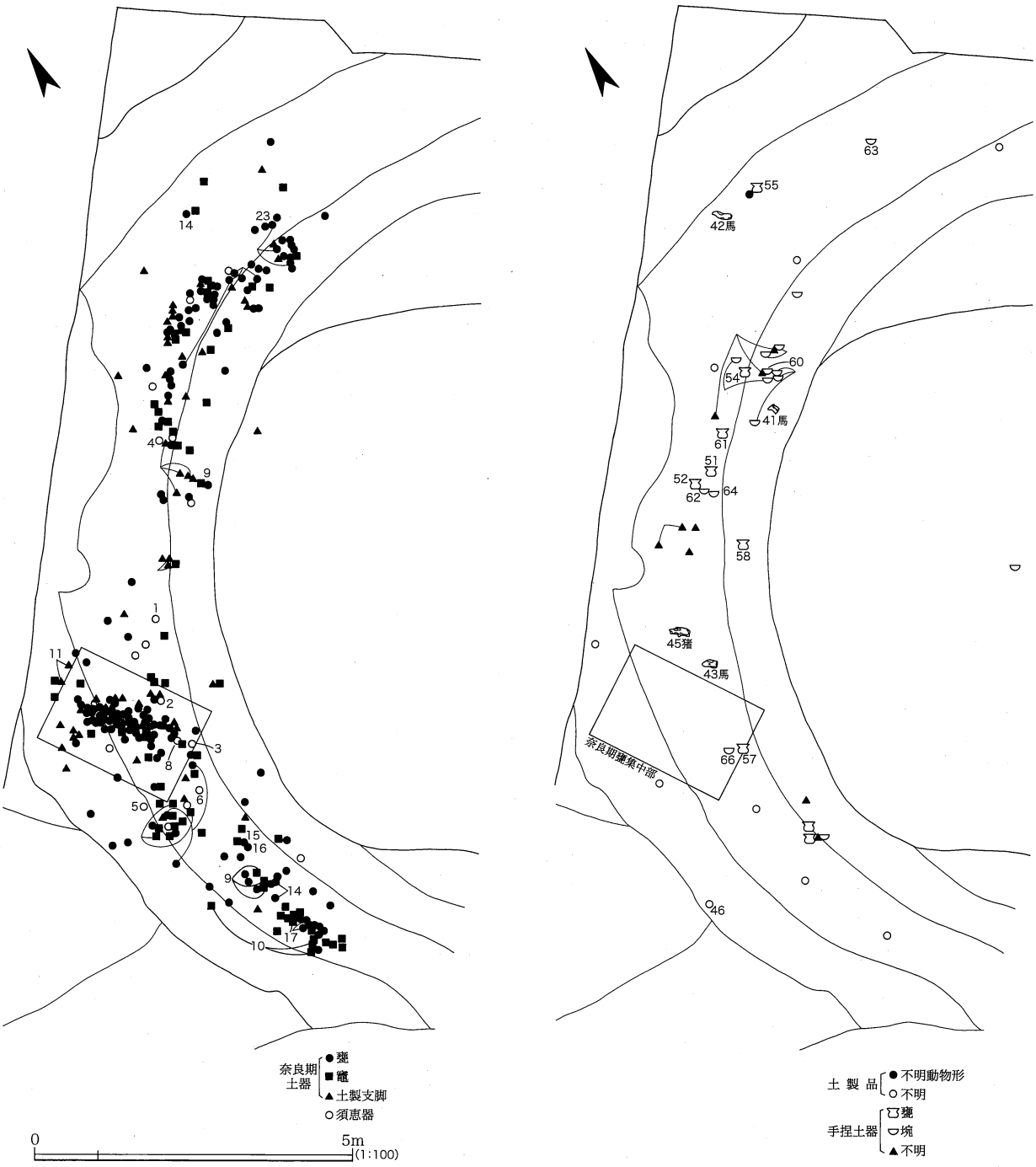
周溝内からは、土師器・須恵器の他円筒埴輪・甑形土器・土製紡錘車・竈・土製支脚、さらには土製動物形・手捏土器・ミニチュア土器などのいわゆる祭祀遺物、臼玉・滑石製模造品・鉄製品などの副葬品、鉄滓・炭化した種子など多種多量の遺物が出土した。遺物が多量に出土したのは主に図中１～８層で、９～12層からの出土遺物は上層に比べ少ない。また、８層以上の層位では下層の出土遺物と時期が異なるため、８層以上を周溝上層、それより下の層を周溝下層として呼ぶこととする。

周溝最下層には、30・32・33層など地山土の大きなブロックがみられ、周溝をある程度まで人為的に埋めた可能性も考えられるが、明らかにはできなかった。周溝下層からは土製紡錘車49、土師器小型丸底壺27～29・甕30・鉢31・高坏33・34、須恵器坏35・瓿36、鉄鏃Ｆ１、砥石Ｓ９などが出土しているが、供献状態といえる出土状況のものはなかった。また、円筒埴輪についてはそのほとんどの破片が周溝上層出土で、基底部の破片が数片しか存在しない点から、直接１号墳に伴わない可能性がある。

周溝上層からは土師器煮沸用具である「く」の字口縁で体部が半球形をなす土師器甕（第15図13～26。以後奈良期甕と仮称）・竈・土製支脚の出土がみられた。これらと土製模造品の分布状況を図化したものが第６図である。このうち周溝西側では奈良期甕・土製支脚が集中して出土している（奈良期甕集中部として後述する）。周溝南西側では土製支脚がほとんど出土せず、奈良期甕・竈が集中するが、奈良期甕集中部のような面的集中ではなく、出土層位もややばらつく。竈については他遺跡例と同様に完形に復元できるものは無く、何個体分かを復元するのも困難な状況であった。手捏土器は周溝の北西側で主に出土している。土製動物形の出土位置は特にまとまりをもたない。また、出土した須恵器では後期古墳に一般にみられる蓋坏・甕が少なく、高坏の個体数が多いのが目立つ。これらも完形近くまで復元できるものは少なかった。

奈良期甕集中部　周溝検出面から0.2m、周溝底面からは0.7m上で、1.8×0.5mの範囲で北西－南東にほぼ一直線に奈良期甕・土製支脚がならぶように出土した。各破片は互いに接するように出土し、短期間の内に置かれているような出土状況である。出土遺物は周溝底面の断面形と同じく北西が高く、南東が低い。集中部の底面でのレベル差は0.5mある。出土した層位は、集中部から下層では奈良期甕・土製支脚などが出土しないため、周溝上層と周溝下層の境目であると考えられる。出土遺物は北西側（高い側）のものが完形度が高い。遺物群の底には直径約25cmほどの平坦な石があり、破片の中にはその石に接した状態で出土しているものもあるが、その破片はより上方の破片と接合している。奈良期甕とセットとして使用される器種であるといわれる土製支脚も、北西の高い側で完形度の高い個体が出土していることなどからも、遺物が主に置かれるのは北西側の部分であると考えられ、底部にある石はその上に遺物をのせるためではなく、何か別の目的があって設置した可能性がある。北西側の遺物出土状況を詳細に観察すると、奈良期甕よりも先に土製支脚が置かれたことが分かる。また、完形近くまで復元できるとはいいながら、奈良期甕のなかで最も上で出土した17以外の遺物はその周辺が埋沈する前にすでに壊れていたような状態での出土であり、17のみが伏せた状態での出土であることと合わせて、ただ廃棄したというだけではなく、何か意味があると考えるべきかも知れない。集中部には最低でも奈良期甕が７個体、土製支脚が３個体認められる。奈良期甕集中部の周辺では、これを囲むような施設は検出できなかった。

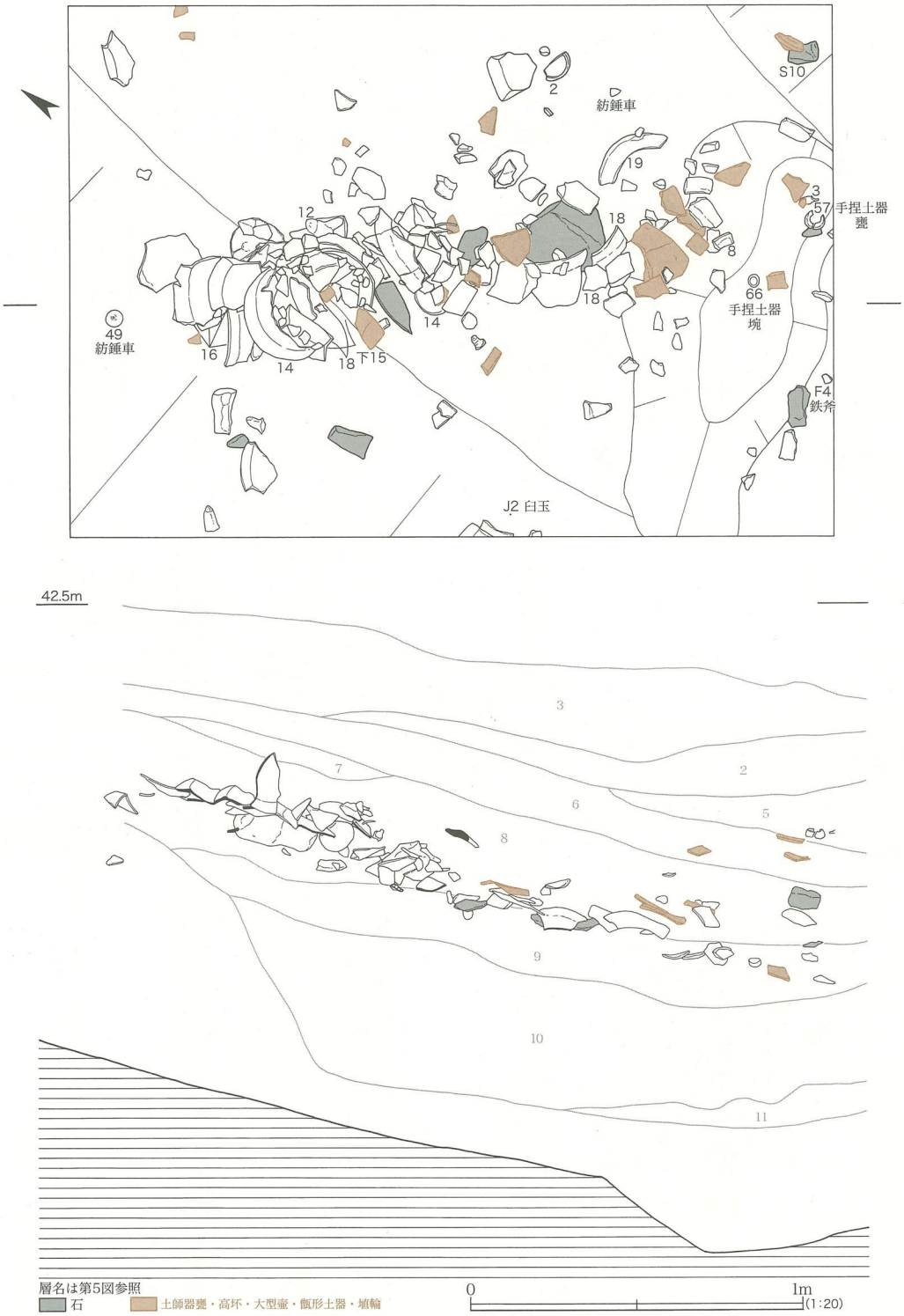
１号住居　丘陵の斜面部分（標高39.5m）に位置する。調査区内で確認したのは北辺と東辺の一部である。２号段状遺構を切り、２号柵列に切られる。流出もしくは後世の削平のため斜面側は失われているが、長方形の住居であると推定される。検出面からの深さは最大で0.54m。埋土は基本的に黒褐色土で炭粒を含み、下層には焼土を含む。床面には柱穴間を結んだライン内に１ヶ所、Ｐ２の外側に１ヶ所焼土面が認められた。柱穴はＰ１・Ｐ２・Ｐ３で、掘り方は円形である。住居床面から検出できたＰ２では、掘り方は床面で直径約0.5m、深さは最



第６図　奈良期甕・竈・土製支脚・土製模造品分布状況図

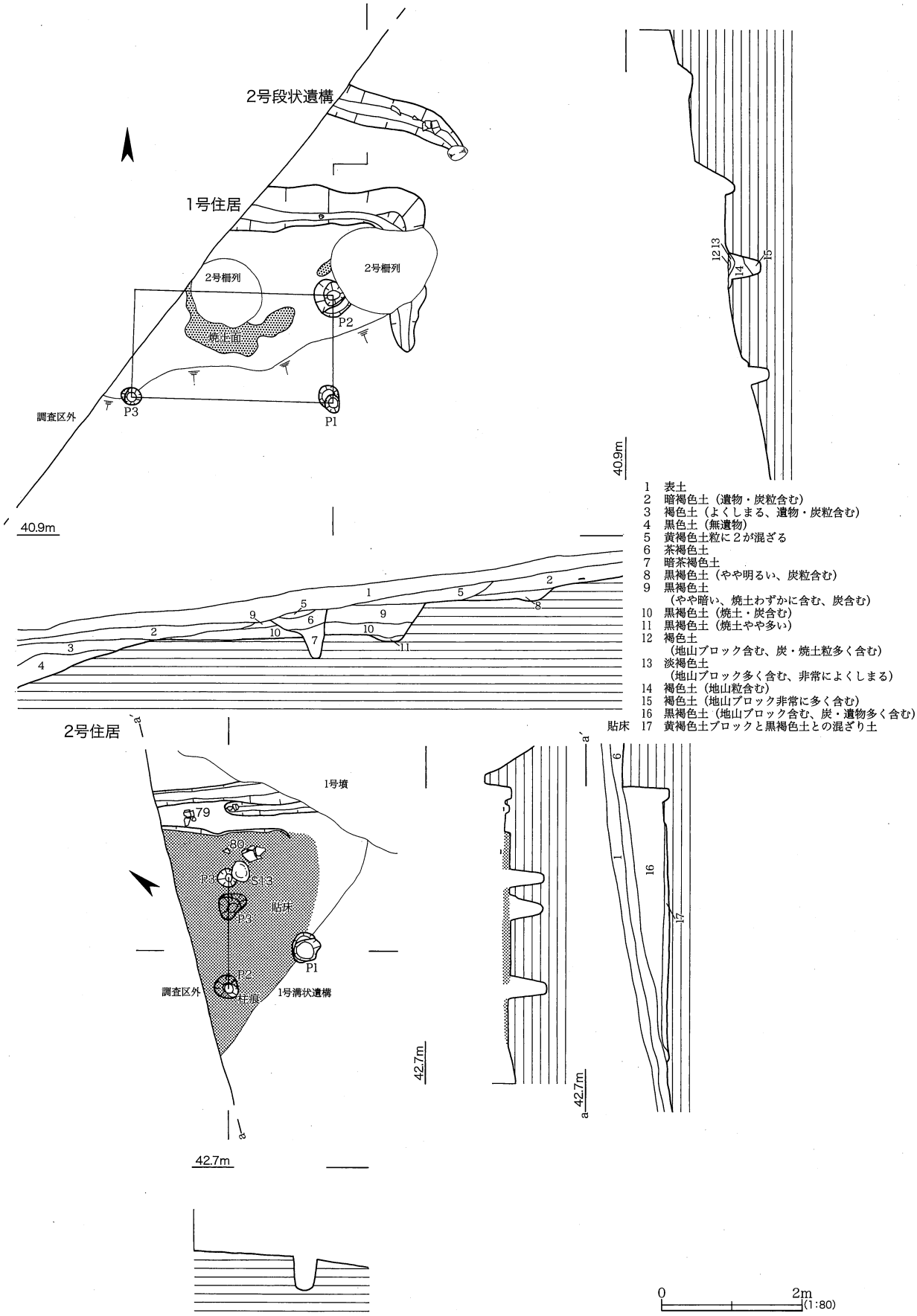
大0.46mである。各柱穴の埋土には柱痕跡はなかった。各柱穴間距離は心々でＰ１－Ｐ２が1.32m、Ｐ１－Ｐ３が2.84mである。床面直上からの遺物はほとんどなく周壁溝の底面から土製支脚の小片が出土しているだけであった。埋土中からは土師器甕などが出土しているが、いずれも小片である。

２号住居　丘陵の尾根部分（標高約42m）に位置する。１号墳及び１号溝状遺構に切られる。一部の検出に止まったが、確認することのできた北東辺が直線的である点や、ピットの並び方などから方形の住居と推定される。検出面からの深さは最大で0.56m。埋土は黒褐色土の単純層で地山ブロックを含み、また炭・遺物とも多量に含んでいる。床面には黄褐色土ブロックと黒褐色土との混ざり土で貼床が施されているのを確認した。貼床土は約

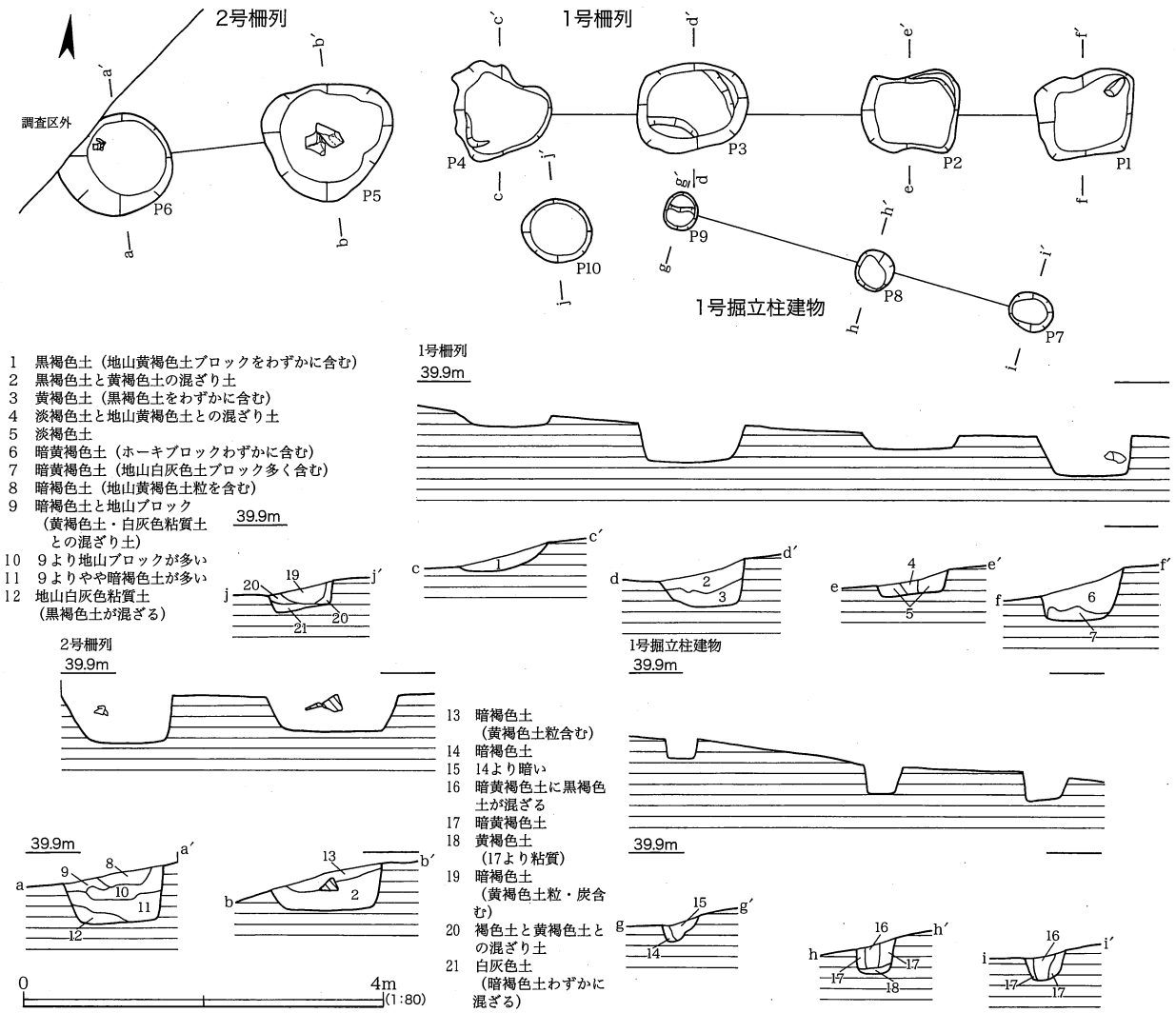


第７図　奈良期甕集中部平・断面図

５cmの厚さがある。貼床土を掘り下げた後、新たにピットと周壁溝を確認したため、建替が行われていることが分かった。柱穴は、建替前はＰ２・Ｐ３′、建替後はＰ２は同位置のままＰ３に拡大させている。西側が調査区外に広がるため、主柱穴は２本だけではない可能性がある。柱穴間距離はＰ２－Ｐ３′で1.16m、Ｐ２－Ｐ３で1.58mである。Ｐ３′が建替のためか不整形になるもののＰ２・Ｐ３の掘り方は円形である。Ｐ２では長径23cm短径16cmの貼床土で埋められていない部分を確認した。Ｐ１は、住居南東辺の周壁溝が他遺構との切り合いのた



第８図　１号・２号住居、２号段状遺構遺構図



第９図　１号掘立柱建物、１号・２号柵列遺構図

めか確認できなかったが、柱穴との位置関係から壁際特殊ピットと考えられる。周壁溝も貼床土と同質の土で埋められている古段階の周壁溝から新段階の周壁溝へ心々で0.24m拡大している。貼床の床面上から、作業台と考えられる扁平な石**S13**と共に、土師器高坏**79**・甑形土器**80**が出土している。

１号掘立柱建物　調査区中央の斜面部分（標高39m）に位置する。ピット列は片側しか確認できなかったが、断面観察で柱（抜き取り）痕跡が確認されたこと、柱穴の規模・配列などから掘立柱建物と考えられる。柱列はＰ７－Ｐ９まで２間分確認した。地形から考えて、桁行２間×梁行１間の建物と推測される。桁行の全長は心々で4.05m、各柱穴間の距離はＰ７－Ｐ８で1.92m、Ｐ８－Ｐ９では2.13mでやや不揃いである。柱掘り方はいずれも不整な円形で直径45cm前後である。軸線上での検出面からの深さはＰ７・Ｐ８で約0.3m、Ｐ９は約0.2mである。遺物はＰ７から土師器甕**81**が、他のピットからも土師器小片が出土した。

柵列　調査区中央の斜面部分（標高39.5m）に位置し、１号・２号溝状遺構から約２～3.5m離れている。ピットの配列から２列存在すると考えられる。方向は等高線にほぼ平行である。

１号柵列　ピットを４基（Ｐ１～Ｐ４）、３間分確認した。長さは心々で6.48mである。各柱穴間の距離はＰ１－Ｐ２で1.92m、Ｐ２－Ｐ３で2.40m、Ｐ３－Ｐ４で2.16mと不揃いである。Ｐ４のみ不整な形をしているが、他は隅丸長方形を基本とした形で、いずれも長軸1.1m前後、短軸１m前後である。検出面からの深さはＰ１・Ｐ

３は0.44m、Ｐ２・Ｐ４は0.18mである。埋土はそれぞれ違うがＰ２では柱抜き取り痕跡と考えられる土層を確認している。Ｐ２の埋土からは須恵器長頸壺82が出土した。

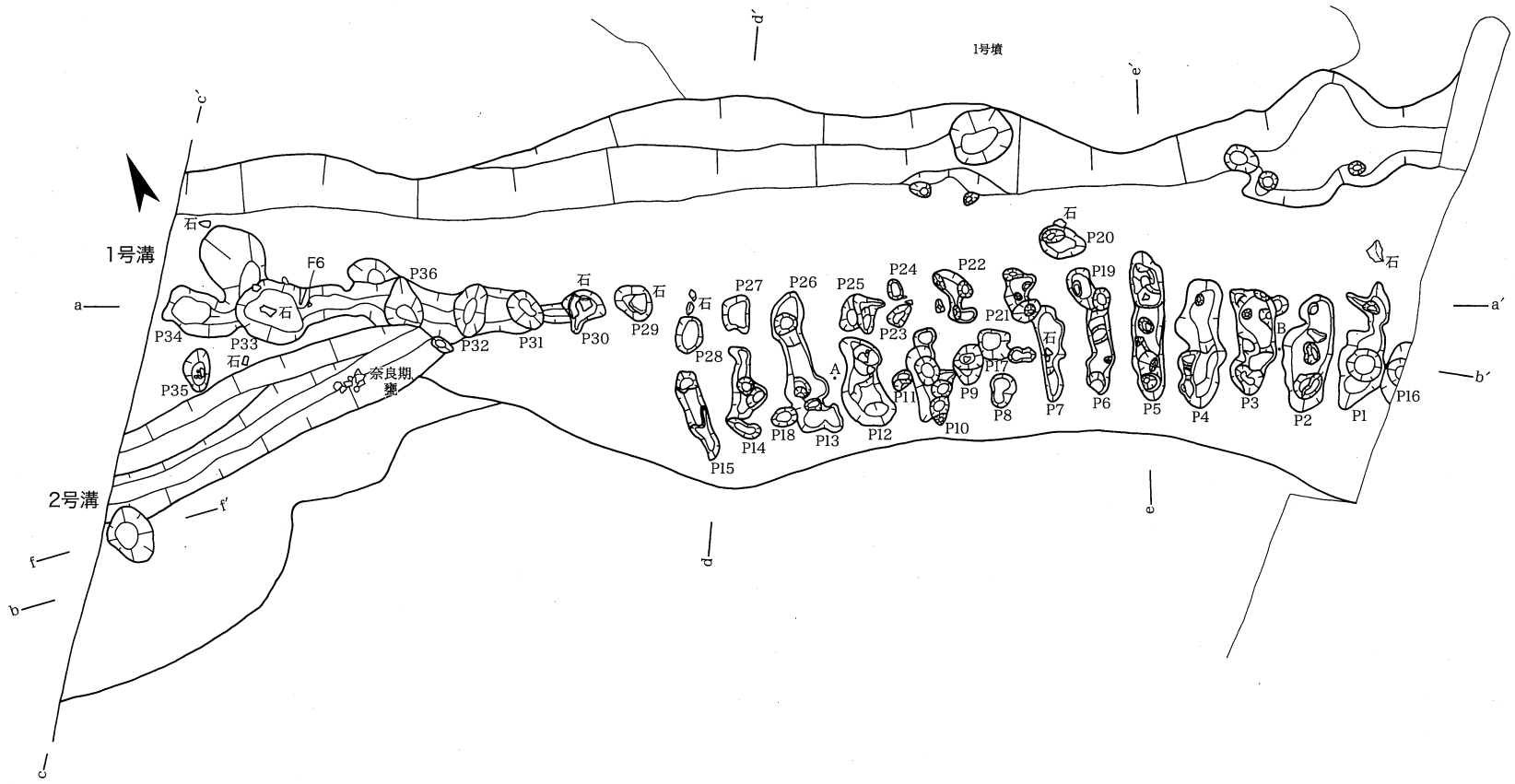
２号柵列　ピット２基（Ｐ５・Ｐ６）の１間分確認した。１号住居が埋まった後に造られる。柱穴間距離は心々で2.38mである。掘り方はＰ５で直径約1.3m、Ｐ６で直径約１mの円形で、深さは最大でＰ５では0.52m、Ｐ６では0.65m、底面はほぼ平らである。両方とも柱抜き取り痕跡は確認できなかった。埋土上層からＰ５では石とともに竈83が、Ｐ６では土製支脚84が出土している。

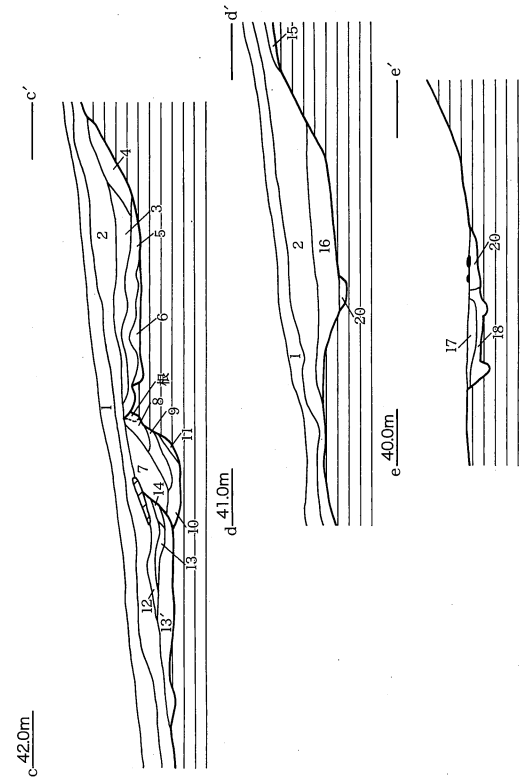
１号・２号溝状遺構　丘陵尾根筋からやや下った位置（標高39～41m）にある。１号墳の南側周溝をやや削る。東西はさらに調査区外に延び、調査区内では長さ14.5m分を検出した。検出した幅は第10図断面ｄ－ｄ′の位置では4.5mである。検出面（北側肩）からの深さはＰ32のあたりで0.3mである。底面の断面形はやや凹んだようになり、底面には楕円形の土壙が心々で0.6～0.7mの間隔で連なる。底面は西に行くほど高く、平均斜度は断面ａ－ａ′で８°、ｂ－ｂ′では土壙列が存在する部分で８°、土壙列より西では４°で、両方共に今回の調査地のある丘陵を徐々に上っていくような傾斜である。検出面の土層はⅥ′黄褐色土で、底面は西半分はⅦ白灰色粘質土まで掘り込むが東半分はⅥ′黄褐色土層中に収まっている。

西側４分の１では底面が２条に分かれ、調査区西壁の断面観察によると斜面上方の溝（１号溝状遺構）のほうが斜面下方の溝（２号溝状遺構）より新しく、さらに２号溝は大きく２時期に分けられることが分かった。断面図ｃ－ｃ′の図中では３～６の層が１号溝、７～11は２号溝（古）、12～14が２号溝（新）の埋土である。２号溝の埋土のうち８～14までは非常に硬化していたが、１号溝の埋土は２号溝のように硬化した土層は認められなかった。２号溝埋土である硬化土は１号溝との重複のためか断面ｄ－ｄ′では確認できず、また、２号溝（古）の底面も調査区西端からＰ32のあたりまでしか確認できない。底面の土壙は長径１～1.4mのもの（Ｐ１～Ｐ７・Ｐ10～Ｐ15）と長径0.6m前後のもの（Ｐ19以降）との２種類があり、両者の切り合いを観察できたＰ５では後者のほうが新しいことが分かった。

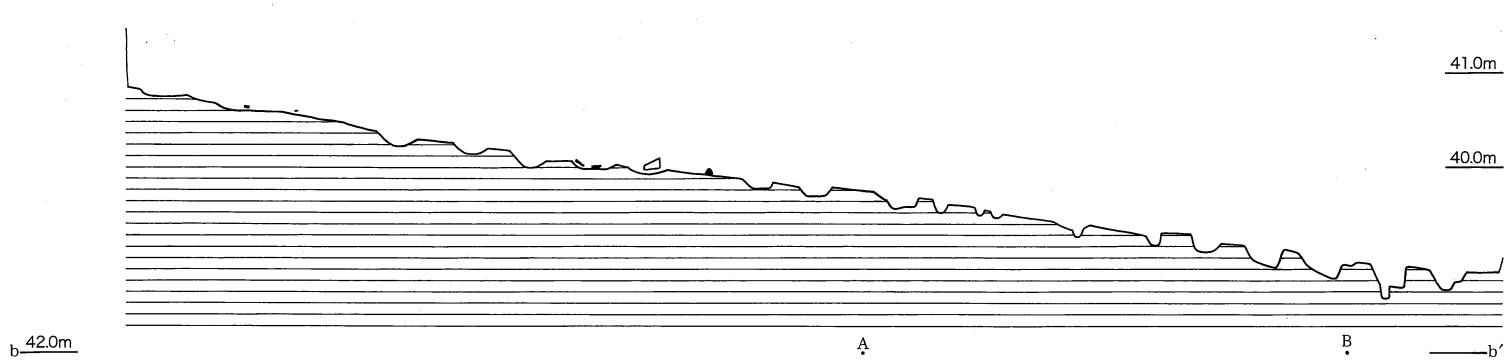
土壙列の方向性と上記の点から溝状遺構の変遷は図中Ａ～Ｃのように考えることができる。２号溝（新）に伴うと考えられる大型の土壙の配列は、わずかに南へ曲がりながら斜面を上るようにならぶが、Ｐ７とＰ10との間に不連続が認められる。同様にＰ27・28とＰ29の間にもやや不連続があるため、土壙数個程度が掘削の単位である可能性が考えられる。底面の土壙は掘り方の形態・底面ともに不整形だが、埋土は１号溝に伴うと考えられる小型のものは基本的に１層、２号溝の大型のものは上下２層の比較的単純なものであった。小型土壙の埋土（図中21）・大型土壙の埋土の内下層（18・19）はやや硬くしまり、上層（17）は軟質である。すべてではないが、土壙埋土上層と下層の境に３㎝程度の土器小片・石がやや面的にまとまりをもって出土したものもあった。また、２号溝検出面（７・12層上面）でも竈・土製支脚などの小片が小型の土壙の大きさと同じ様な範囲でまとまって出土している部分があった。土壙内からは土師器・須恵器・竈など多種の土器片や平瓦95・鉄滓さらには滑石製臼玉Ｊ３などが出土した。また、溝底面（土壙検出面）では土器片・石・不明鉄製品Ｆ６が出土している。

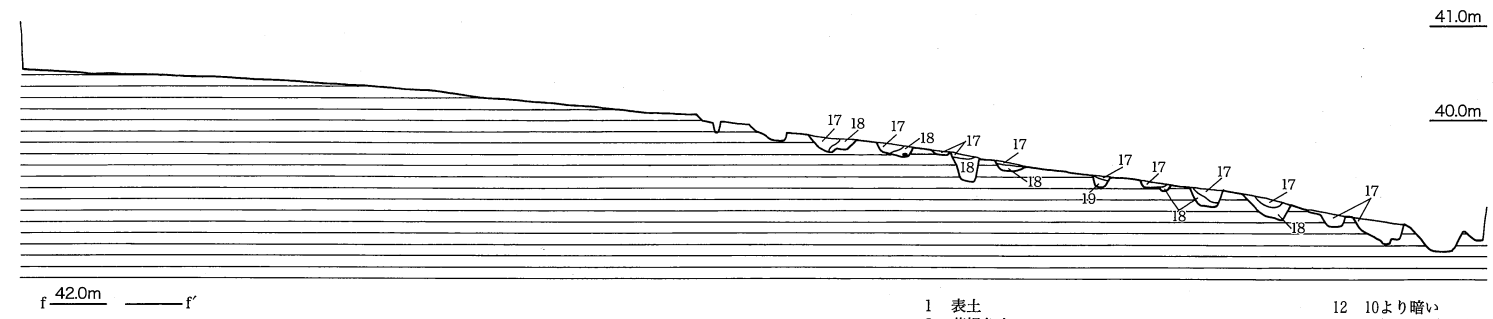
３号溝状遺構　丘陵尾根筋、１号墳の北側周溝内で確認した。周溝の掘り下げ中に硬化面（第３図全体図アミ部分）を検出し、その後各断面での確認になったため、細部の形状等は未確認である。調査区の西壁と東壁で３号溝底面の硬化土層（北壁は第５図ｃ－ｃ′の37・38層。南壁はｄ－ｄ′の40層）を確認しているため調査区を越えて東西に延びると思われる。調査区北壁の土層断面では、１号墳周溝がほぼ完全に埋まってから掘り込まれている。底までの埋土上層は軟質である。底面の硬化土（面）は連続して確認できなかったが、１号墳周溝の北側部分の埋土も３号溝上層の埋土と同質で、周溝西側のような遺物の多量の出土がみられなかった点、２号土壙の断面でも硬化土（第12図の１層）が確認できた点などを考えると、１号墳の北側に沿った形で延びていたことが

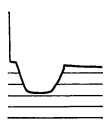


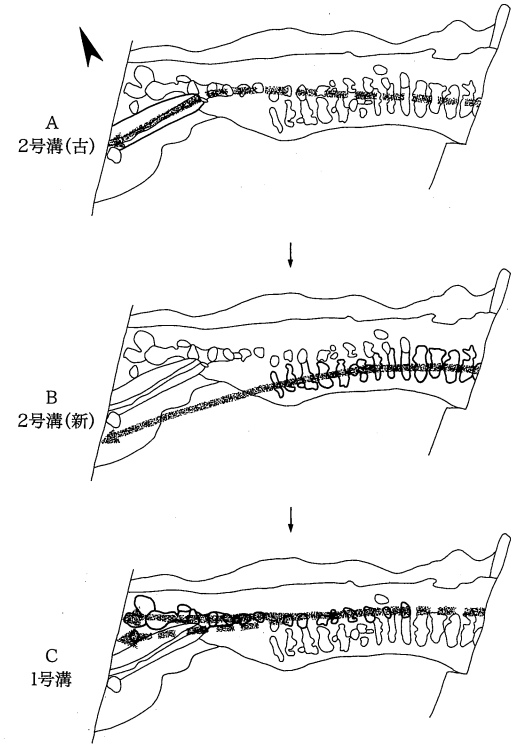


1号・2号溝状遺構 変遷図



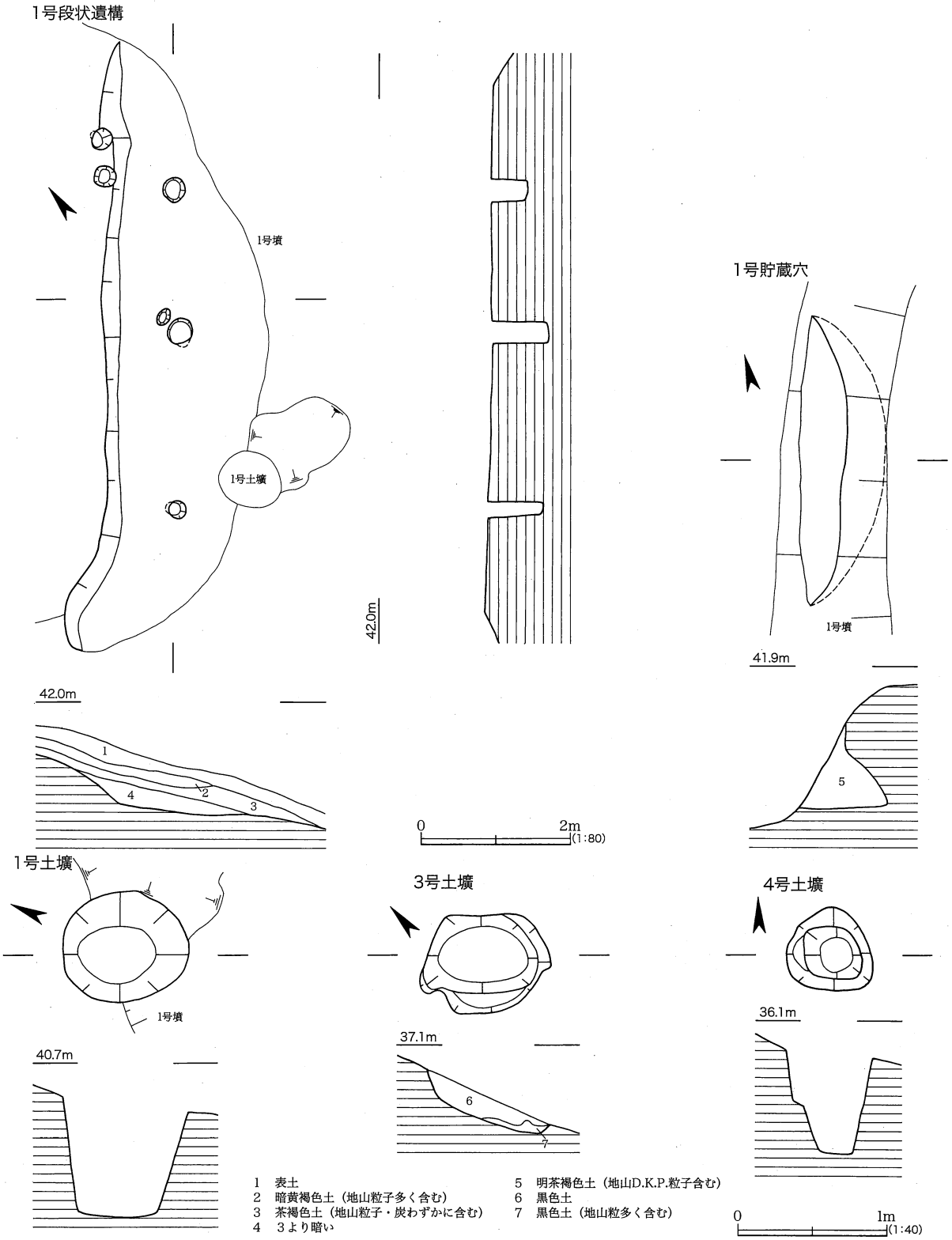






1　表土
2　茶褐色土
3　褐色土
4　褐色土と地山黄褐色土との混ざり土
5　淡褐色土（黄褐色土粒含む、ややしまる）
6　暗褐色土と地山白灰色粘質土との混ざり土
7　黒褐色土（ホーキ粒わずかに含む、やや軟らかい）
8　暗黄褐色土
9　暗褐色土と地山白灰色粘質土との混ざり土
10　黒褐色土（ホーキ粒わずかに含む）
11　黄褐色土と暗褐色土との混ざり土
12　10より暗い
13　淡褐色土（粘質強い）
13′　淡褐色土
14　9より暗い
15　暗褐色土（明るくしまりがない）
16　暗黄褐色土
17　暗茶褐色土
18　灰褐色土（非常に硬化している）
19　明黄褐色土（非常に硬化している）
20　暗茶褐色土と灰褐色土との混ざり土
※　8～14は非常に硬い

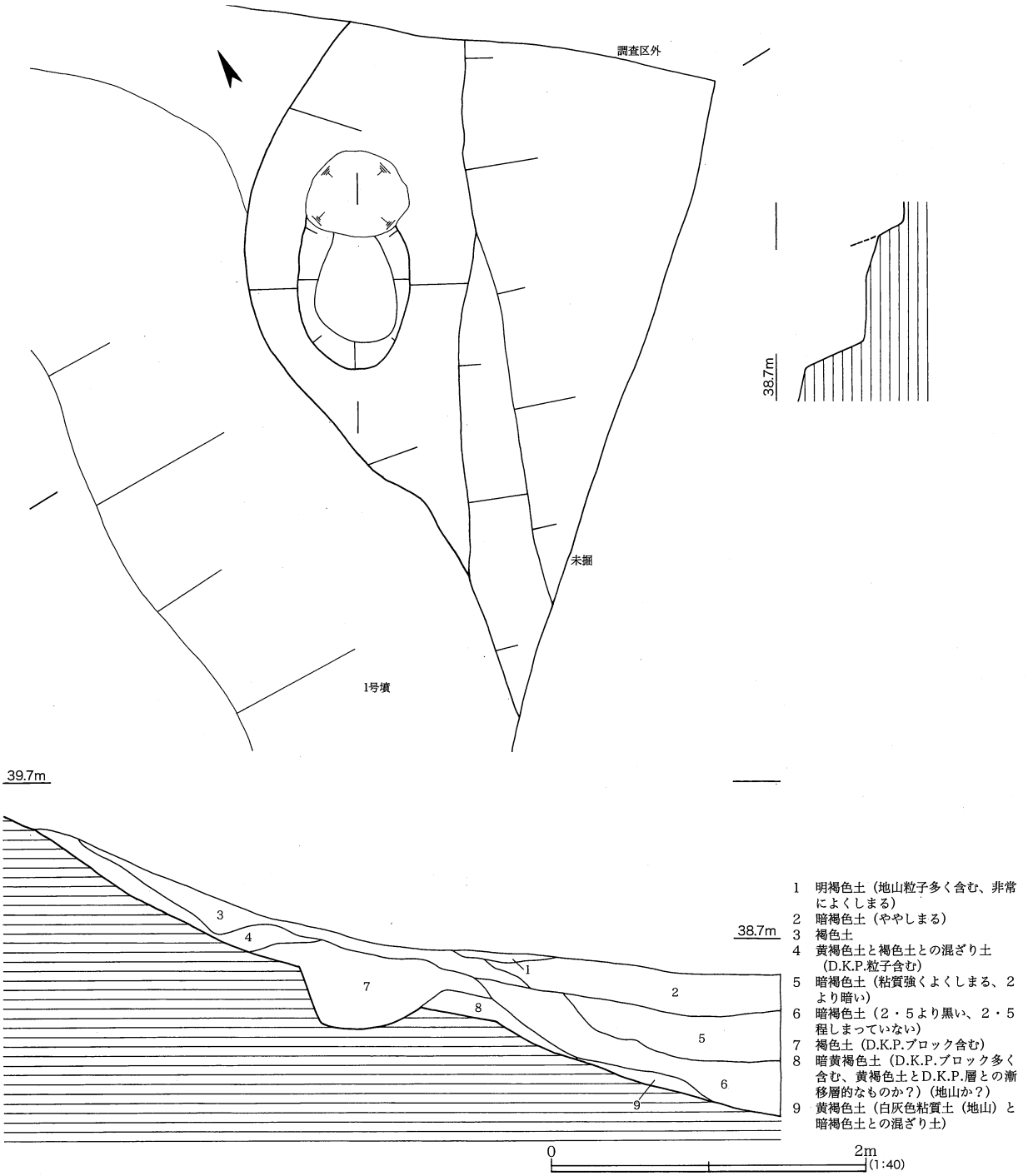
第10図　1号・2号溝状遺構遺構図



第11図　1号段状遺構、1号貯蔵穴、1号・3号・4号土壙遺構図

想像される。時期を示す明瞭な遺物は出土していないが、各遺構が完全に埋まった以降の築造であり、埋土もかなり軟らかくしまりがないことなどから比較的新しい可能性が高い。

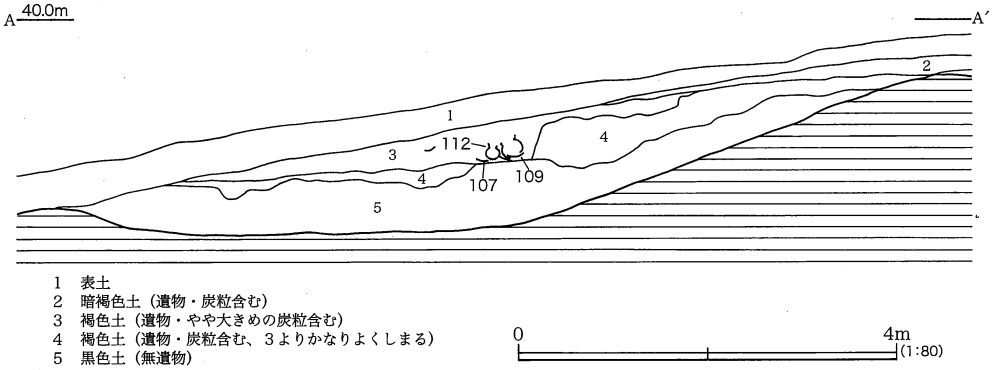
1号段状遺構　丘陵尾根部分（標高41m）、1号墳の東側頂部で検出した。1号墳に切られ、東側は遺存しない。平坦面は最大で長さ8.2m、幅1.9mで、深さは検出面から0.25mである。埋土は茶褐色土の単純層で、土師器小型丸底壺96・壺97・甕98・99・高坏100などの遺物を比較的多量に含む。底面はほぼ平らで直径0.25～0.30mの



第12図　２号土壙遺構図

ピットが３基ならぶ。ピットは深さ0.50～0.74mと不揃いである。１号墳に削られる東側斜面でも、同程度の間隔・深さであれば検出可能だが、ピットは確認できなかった。底面からの遺物はなかった。

２号段状遺構　丘陵斜面部分（標高40m）に位置する。調査区内では１号住居と重複するため、全容は不明であるが、斜面をカットし水平部分を造り出しており、また、１号住居とは時期が違う遺構である可能性があるので段状遺構とした。平坦面の長さは2.6m、幅は１m確認した。肩から平坦面までは0.15mの深さがある。段の際は幅0.5m、平坦面からの深さ３㎝程度の浅い溝状になる。埋土からは土師器甕・高坏・小型丸底壺などの小片が出土している。溝部分の底部からは甑形土器が出土した。



第13図　土器溜断面図

１号貯蔵穴　丘陵尾根部分、１号墳の西側で検出した。１号墳の周溝に切られて、わずかに遺存する。貯蔵穴直上部分の地山面から底面までの深さは0.8mである。断面の形態は三角フラスコ状になると推定される。底面は確認した範囲では幅1.94m・奥行き0.58mを測り、遺存している部分から直径2.4m程度に復元される。埋土中からは弥生土器甕101・102が出土した。また、貯蔵穴周辺の１号墳周溝最下層より、弥生土器高坏103・104が出土している。

１号土壙　丘陵尾根部分、１号段状遺構の中に位置する。掘り方は0.84×0.74mの楕円状である。深さは0.9mで、底面はほぼ水平である。埋土は褐色土系の単純層であった。遺物は主に埋土上層に多く、土師器甕105・106・高坏・小型丸底壺が出土している。

２号土壙　調査区北東隅の丘陵尾根部分に位置する。１号墳の周溝を削る形で北東側に急に低くなっている部分に造られている。長軸は0.84m残存し、短軸は0.72mで、深さは最大で0.4mである。断面観察によると、２号土壙上に幅2.12m、土壙肩からの高さ約0.2mの盛り土状の層（第12図断面図７層）が認められた。調査区外の法面の観察から１号墳の東側にも古墳が存在する可能性があり、２号土壙はその古墳の周溝内埋葬施設の可能性が考えられる。大山遺跡Ｃ地区[註)]などで周溝内埋葬施設にも墳丘が造られる例が知られているが、２号土壙上に確認した７層は盛り土と考えられるような硬さがなく、その範囲も明確にはしがたいこと、供献状態と考えられる遺物も存在しないことなどから現段階ではその判断は保留したい。土壙内からは土師器小片が出土した。

３号土壙　調査区南側の斜面部分（標高37m）に位置する。基本的層序のところで述べたⅡ′層下の黒色土上面では検出できず、確認できたのは黒色土下のⅤ層上面であるが、埋土が黒色土であるため本来の検出面は黒色土上面であると考えられる。長軸0.88m、短軸0.66m、土壙肩から鉛直方向に最大0.21mの深さがある。埋土から遺物は出土しなかった。

４号土壙　３号土壙から南東に1.74m離れた所（標高36m）に位置する。確認したのは黒色土下のⅤ層上面だが、３号土壙と同じく埋土は黒色土のため本来の検出面は黒色土上面と考えられる。長軸は0.59m、短軸は0.57m、土壙肩からの深さは最大0.76mである。埋土から遺物は出土しなかった。

土器溜　調査区南側の調査区際（標高38.5m）、１号住居から約4.5m南東に位置する。斜面部分の包含層を掘り下げ中に土師器甕が集中して出土したため周辺を平面的に精査したが、掘り方にあたるものは検出できなかった。調査区際にサブトレンチを設定し土層を確認したところⅡ層（第13図断面図２層）の下、Ⅱ′層（断面図中４層）の上面からテラス状に落ち込む層（断面図中３層）の底面にほぼ正位のまま土師器甕が置かれているような状態であることが確認できた。再度平面的に精査したが、掘り方のプラン・床面共に確認できず、土器の集中範囲を確認するに止まった。集中範囲は１×0.8mの範囲で、調査区外には広がらない様子である。土器を含む落ち込み（３層）の断面形態は２段掘りのようになるが、１段目の肩、底面の境界は漸移的であった。２段目の深さは

0.38mである。集中して出土した遺物は土師器甕が６個体107～110、小型の甕が２個体111・112で、ほぼ完形のまま出土した。竪穴式住居・段状遺構などの遺構である可能性も十分考えられるが、落ち込みに伴うピットなどが検出できなかったため、今回は土器溜として報告した。

註　眞田廣幸他　『立縫遺跡群Ⅳ　大山遺跡発掘調査報告書（Ｃ・Ｄ地区）』　倉吉市教育委員会　1989

２　遺物

今回の調査では弥生土器・土師器・須恵器・土製品・鉄製品・玉類・石製品などコンテナ約50箱分の遺物が出土した。ここでは土製品・鉄製品（第22図）などについて述べ、その他は観察表に一括した。

遺跡全体で出土した土製品の種類と数は、土製馬形４、土製猪形１、土製動物形１、土製紡錘車６、土玉１、手捏土器48（甕13、埦21、器種不明14)、その他器種不明の土製品30の合計91である。

土製馬形（41～44）　具象的な外形だが目鼻口の表現がない頭部片41、同じく口しかない頭部から胴部の42と、抽象的に目鼻口とたてがみを表現した頭部片43・44がある。

土製猪形（45）　具象的な外形で耳と尾を表現し、左側二肢が欠けている。

土玉（50）　直径2.4cmで上下から穿孔をするが貫通していない。

土製紡錘車（47～49）　６個体出土した。断面形態が板状のもの１点（47)、三角形のもの１点、高い台形のもの１点（48)、コマ形のもの２点（49)、他１点の４タイプある。いずれも調整はナデによる。コマ形の49は上下から穿孔する。

不明土製品（46・75・76）　46は鳥または魚とも推定される均一の厚さを持つ板状ものである。片面に沈線を施し、翼と尾？あるいはヒレ？を表現する。裏面はナデる。76は円形になるとみられるもので、須恵器坏蓋のかえり状の突起があり、その内側はケズる。その反対側はナデる。75は、器台状で焼成前に穿孔を施す。

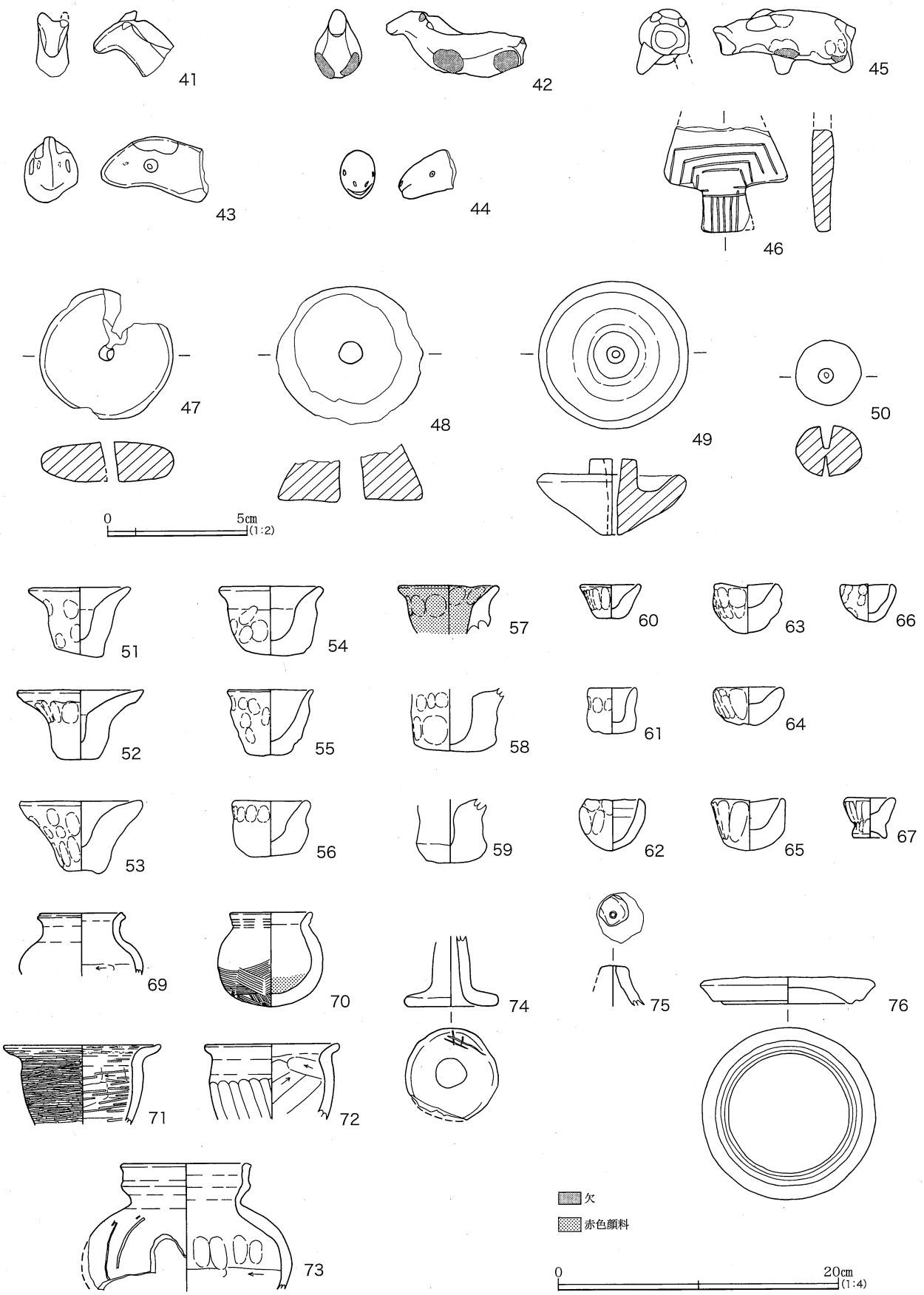
手捏土器　形態により、口縁部が外方に屈曲しているものを甕、口縁部が屈曲せず体部外反のものを埦として取り扱った。

甕（51～59）　底部の欠損した57を除き平底で、大きく口縁部が外反する51～53とそうでないものとある。調整は指オサエとナデによる。

埦（60～68）口縁部が直線的に外反する60、ほぼ直立し底部に粗いハケメのある61、内湾気味のその他のものがある。調整は、外面指オサエ内面ナデを基本とする。粘土の輪積み痕跡が口縁部に遺存する62、板痕跡のある60・63がある。67・68は底部を高台状に作り出す。

鉄製品（Ｆ１～Ｆ５）　Ｆ１は鉄鏃の茎片、木質が一部遺存。残存長3.2cm、残存幅0.5cm、残存厚0.3cm。Ｆ２は長頸鏃とみられる破片で平面形は片刃箭形、断面形は平刃。逆刺は無し。刃の先端は曲げられている。残存長8.3cm、残存幅1.1cm。Ｆ３は鑿状鉄製品。残存長13.6cm、幅0.6cm。Ｆ４は有袋鉄斧（無肩）の袋部分。残存長4.5cm、残存幅2.8cm、残存厚0.8cm。Ｆ５は完形で種別不明。長さ2.7cm、幅2.4cm、厚さ0.4cm、重さ9.1ｇ。

鉄滓について　今回の調査で合計35点、1,282ｇの鉄滓が出土している。出土地でみると１号・２号溝状遺構埋土中が14点・536ｇ、１号墳周溝上層で９点・234ｇである。表土・包含層出土のものも１号・２号溝状遺構周辺のものが多い。鉄滓が後期古墳の副葬品・供献遺物として出土している例が岡山県など西日本各地で知られている。[註)] １号墳は墳丘上部が削平され、細かくは言及できないが、出土地がいずれも７世紀後半以降の層位の出土で、周溝下層の出土が全くない点を重視するなら、古墳に供献された遺物ではなく、フイゴの羽口・坩堝などは出土していないものの、今回の調査地の近隣に製鉄もしくは鍛冶遺構の存在を示唆するものかもしれない。


41
42
45
43
44
46
47
48
49
50
0
5cm
(1:2)
51
54
57
60
63
66
52
55
58
61
64
53
56
59
62
65
67
69
70
74
75
76
71
72
73
欠
赤色顔料
0
20cm
(1:4)

第14図　祭祀遺物

勾玉模造品（Ｊ１）　滑石製の模造品で一部欠損。残存長3.9㎝、最大幅2.1㎝、最大厚0.5㎝、両面穿孔で板状である。

臼玉（Ｊ２・Ｊ３）　２個体出土した。肉眼観察では表面が緑色で、どちらも滑石とみられ、側面に縦方向の擦痕が遺存する。**Ｊ２**は長さ3.4㎜・直径5.7㎜・孔径1.8～2.0㎜、**Ｊ３**は長さ3.1㎜・直径5.7㎜・孔径1.8～2.0㎜である。

註　大澤正己　「古墳供献鉄滓からみた製鉄の開始時期」『季刊考古学第８号』　雄山閣出版　1984

祭祀遺物

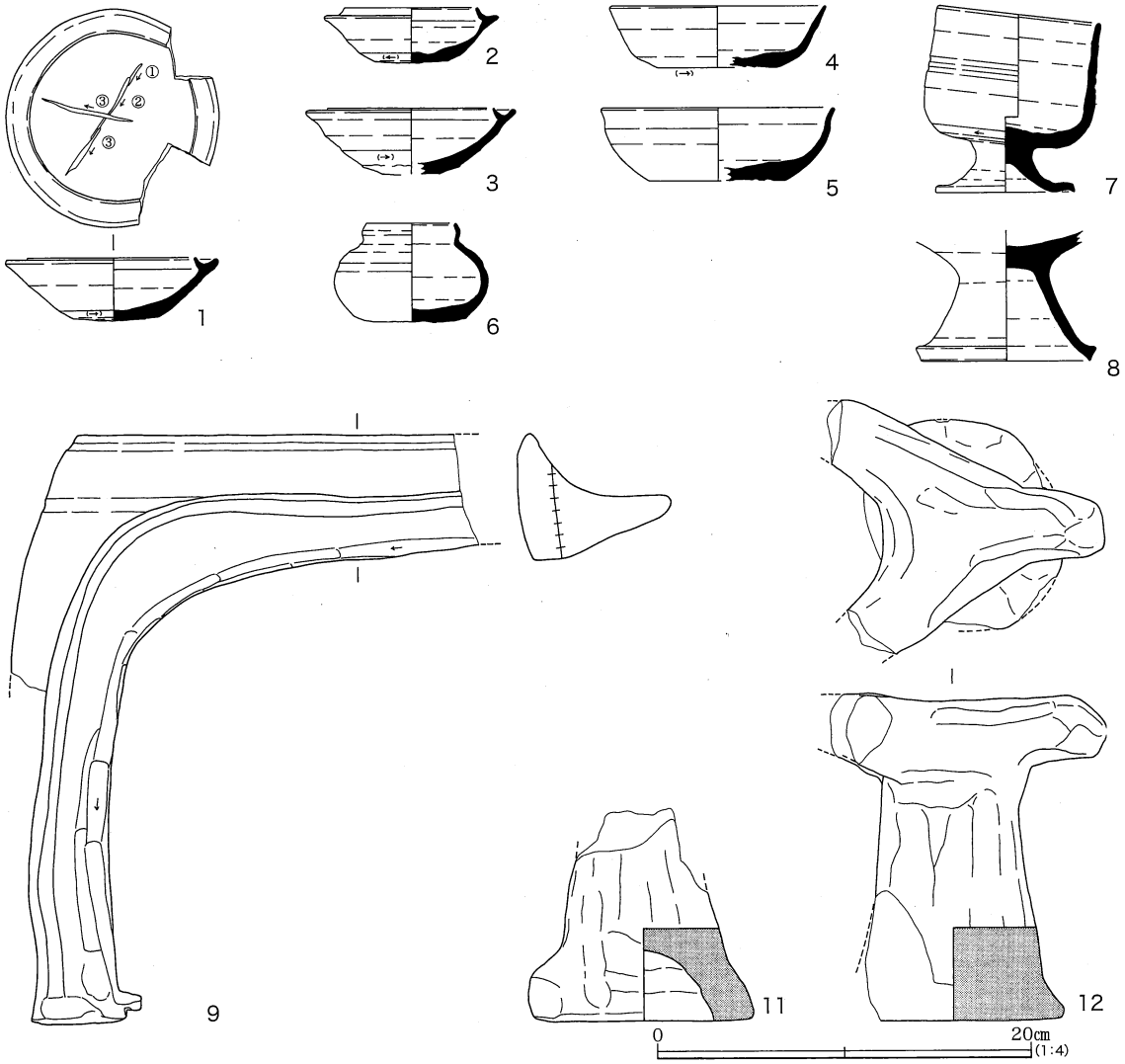
〔法量(　)は推定値〕

出土位置	No.	器種	法量(cm)	形態	手法	胎土　焼成　色調　遺存度
１号墳周溝下層	69	ミニチュア土器壺	口径　(5.8) 最大胴径 (8.8)	口縁部は外反し、端部はやや角張り、端面は凹面をなす。	口縁部内外面ヨコナデ。体部外面はナデ調整。内面最大胴径位より上はナデ、下半は横方向のヘラケズリ。	胎土密。２㎜以下の砂粒わずかに含む。赤褐色粒子含む。焼成良好。淡白褐色。口縁部～体部上半1/5遺存。
	70		口径　(5.5) 最大胴径 7.5 器高　6.7	口縁部は短く外反する。頸部外面には２条の沈線がめぐる。体部は球形で、器壁が厚い。	口縁部から体部上半はナデ。体部下半は外面ハケメ調整、内面はヘラケズリ後ナデ。	胎土密。１～５㎜大の砂粒含む。焼成良好。淡桃褐色。底部内面に赤色顔料残る。口縁部2/3欠損。
調査区Ｓ区	71	ミニチュア土器甕	口径　(11.0) 最大胴径 (8.7)	口頸部は横方向に開く。端部は丸い。	口縁部内外面ヘラミガキ後ヨコナデ。体部外面非常に丁寧なヘラミガキ、内面横方向のヘラケズリ後ヘラミガキ。	胎土密。１～２㎜大の砂粒含む。焼成良好。内面暗褐色、外面黒褐色。口縁部～体部1/5遺存。
１号墳周溝上層	72		口径　(9.2) 最大胴径 (8.9)	口縁部は短く外へ開く。端部は丸い。	口縁部内外面ヨコナデ。体部外面は縦方向のナデ、内面は斜め方向のヘラケズリ。	胎土密。１～２㎜大の砂粒比較的多量に含む。焼成普通。暗褐色。口縁部～体部1/3遺存。
調査区Ｓ区	73	土師器甕	口径　(8.8) 最大胴径 (15.0)	小型。口縁部は退化した二重口縁で、屈曲部は鈍い。体部最大胴径位に、焼成後の穿孔とみられる欠損部分がある。外面体部上半に、点と線を単位とする２本の線刻がある。	口縁部内外面ヨコナデ。体部内面、頸部から最大胴径位まではナデで、指頭圧痕残る。最大胴径位以下は横方向のヘラケズリ。	胎土密。１～４㎜大の砂粒含む。焼成良好。淡褐色。口縁部～体部1/4遺存。
１号段状遺構埋土上層	74	ミニチュア土器高坏	脚径　(6.0)	高坏の脚部。裾部は横方向に屈曲し、端部は丸い。底部には、ヘラ記号が認められる。	柱状部内面は器面平滑。その他はナデ。	胎土精良。１㎜大の砂粒わずかに含む。赤褐色粒子含む。焼成普通。淡褐白色。脚部のみ遺存。端部1/4欠損。

１号墳

〔法量(　)は推定値〕

出土位置	No.	器種	法量(cm)	形態	手法	胎土　焼成　色調　遺存度
周溝上層	1	須恵器坏	口径　9.1 器高　3.4	小型化し、短いたちあがりを有する坏。２は受部が横方向に開きたちあがりにやや高さがある。１・３はたちあがりが矮小で、受部は外上方へのびる。１の内面に浅くやや幅広のヘラ記号有り。	口縁端部はいずれもヨコナデ。内面は仕上げナデ。底部外面は１・３は時計回り、２は反時計回りのヘラ切り。後１・２はナデで仕上げる、３は未調整。	胎土密。１～２㎜大の砂粒ごくわずかに含む。黒色物質わずかに含む。焼成良好。外面に黄色の自然釉がかかる。淡灰色。口縁部1/4欠損。
(奈良期甕集中部)	2		口径　(7.2) 器高　3.0			胎土密。１㎜大の砂粒わずかに含む。黒色物質比較的多量に含む。焼成良好。外面灰がかかる。淡灰褐色。底部外面に2.5㎝×1.3㎝大の別個体の破片が溶着。1/2欠損。
	3		口径　(8.9) 器高　3.5			胎土密。１～２㎜大の砂粒比較的多量に含む。焼成良好。内面暗青灰色、外面黒灰色。2/3欠損。
	4		口径　(11.4) 底径　(6.5) 器高　3.3	底部は平坦で、口縁部は外上方へ直線状にのびる。	口縁部は内外面ヨコナデ。底部内面は回転を利用したナデ。底部外面は時計回りのヘラ切り後未調整で、粘土塊を残したまま。	胎土密。１㎜以下の砂粒わずかに含む。黒色物質わずかに含む。焼成良好。外面一部光沢をもつ。淡灰色。口縁部1/3、底部1/2欠損。
	5		口径　(12.2) 底径　(7.3) 器高　(3.9)	底部は平坦で、体部は内湾しながら開き、口縁部は外反する。	口縁部・体部は内外面ヨコナデ。底部内面は仕上げナデ、外面はヘラ切り後未調整。	胎土密。２㎜以下の砂粒比較的多量に含む。黒色物質比較的多量に含む。焼成良好。外面光沢をもつ。淡灰色。口縁部4/5、底部1/2欠損。



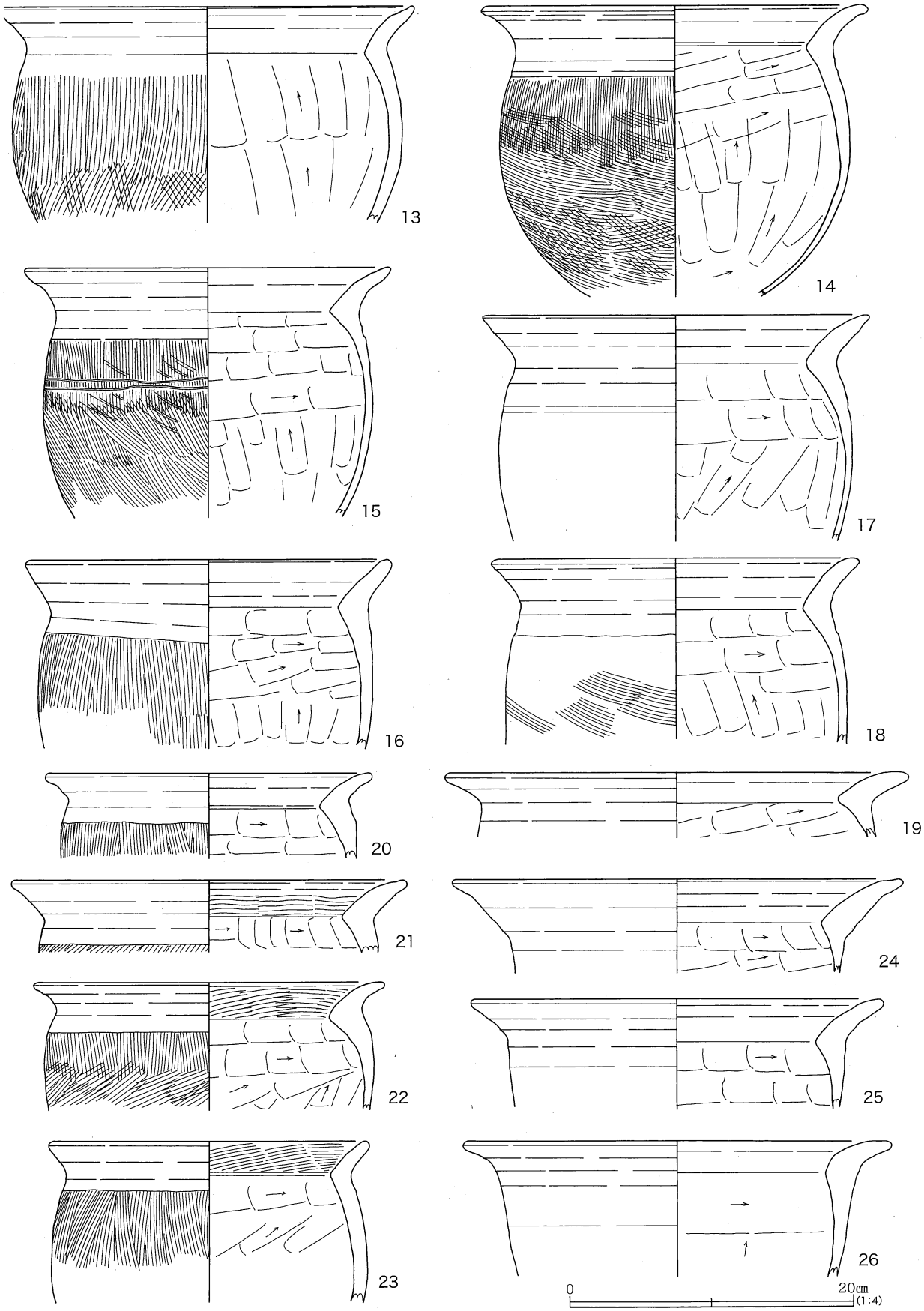
第15図　1号墳周溝上層出土遺物1

〔法量(　)は推定値〕

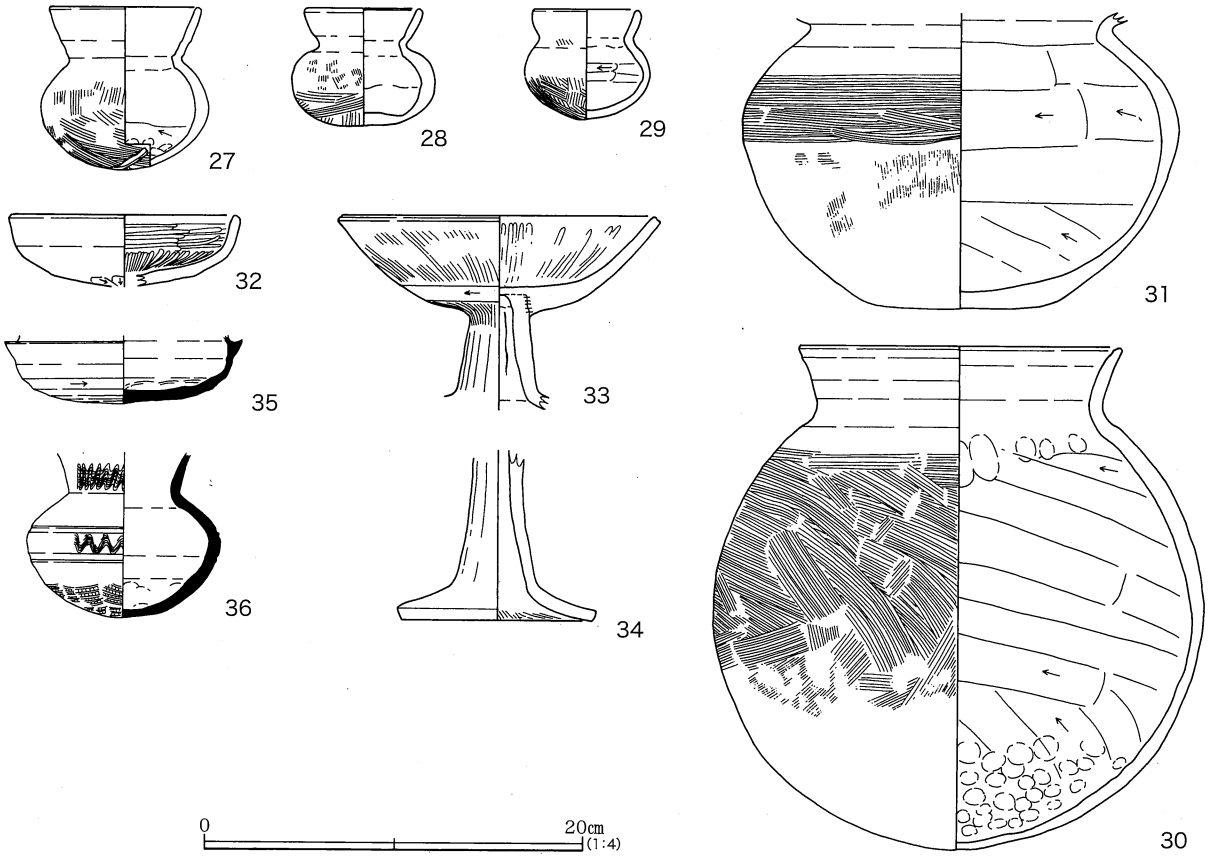
出土位置	No.	器種	法量(cm)	形態	手法	胎土　焼成　色調　遺存度
周溝上層	6	須恵器 小型短頸壺	口径　(4.8) 最大胴径 (8.2) 器高　5.3	底部は平坦。体部は胴が張り、肩部からやや下がった位置に沈線がめぐる。口縁部は内湾する。	口縁部から体部上半まで内外面ヨコナデ。体部外面沈線を施した後ナデ。底部外面はヘラ切り後ナデだが調整が粗雑で、器面粗い。底部内面は回転を利用したナデ。	胎土密。焼成良好。淡灰色。口縁部～体部1/2欠損。
	7	須恵器 脚付塊	口径　(8.6) 脚径　(7.3) 器高　(10.0)	底部は平坦で、体部は直線的に上方へのび口縁部はわずかに外反する。脚部は短く大きく外反しながら広がり、端部はわずかに下方向へ屈曲する。体部には沈線が2本めぐる。	口縁部から体部上半は外面沈線の施文後ヨコナデ。底部外面は反時計回りのヘラケズリ、内面はナデ。脚部は内外面ヨコナデ。	胎土やや粗。1～3㎜大の砂粒わずかに含む。焼成普通。淡灰色。口縁部～体部2/3、底部4/5、脚端部2/3欠損。
(奈良期壷集中区)	8	須恵器 高坏	脚径　(8.9)	脚部は直線的に外へ開く。端部は外へ屈曲し、下方向へ引き出される。	坏底部外面はナデ、内面は多方向の仕上げナデ。脚部は内外面ヨコナデ。	胎土密。1～2㎜大の砂粒含む。焼成普通。淡黒灰色。坏体部以上欠損。脚部1/5、脚端部2/3欠損。
	9	竈	器高　31.5	体部は上にいくほどやや湾曲しながらすぼまる。庇はほぼ水平にのびる。庇から釜孔までは短い。釜孔の形は隅丸方形に近い。	外面体部上半は斜め方向のナデ、下半は縦方向のナデ。釜孔の端部は横方向のナデ。端部のナデは強い。内面体部上半は縦方向のヘラケズリ。焚口内面はヘラケズリ。	胎土やや粗。1～3㎜大の砂粒多量に含む。赤褐色粒子比較的多量に含む。焼成良好。内面赤褐色、外面淡褐色。庇部分約2/3、体部上半約1/3遺存。
	11	土製支脚	底径　(11.7)	頂部に2本は長い、1本は短い把手を持つ。11は底部にえぐりがあるが、12は平坦。	体部は縦方向のナデ。体部下端は横方向のナデ、指頭圧痕がみられる。	胎土密。1～3㎜大の砂粒比較的多量に含む。赤褐色粒子比較的多量に含む。焼成良好。淡褐色。体部下半約1/2遺存。

〔法量(　)は推定値〕

出土位置	No.	器種	法量(cm)	形態	手法	胎土　焼成　色調　遺存度
周溝上層 (奈良期甕 集中部)	12	土製支脚	底径　(12.0) 器高　(12.6)		頂部・把手周辺は横方向の、体部は縦方向のヘラケズリ。底部には板目残る。	胎土密。1～5㎜大の砂粒比較的多量に含む。赤褐色粒子比較的多量に含む。焼成良好。淡赤褐色。把手2本、体部下端1/3欠損。
	13	奈良期甕	口径　(28.9) 最大胴径 (27.5)	基本的に口縁部は外反して外に開き、体部は球形。口縁部が長いもの13～18・21・24・25、短いもの20・22・23、短く横方向に開くもの19・26の差がある。また24～26は最大胴径位が頸部にある。15は体部上半に2条の不整な沈線が施される。	基本的に口頸部はヨコナデだが、21～23の口縁部内面に横方向のハケメの痕跡がのこる。体部外面は上半を縦方向のハケメ、下半を斜め～横方向のハケメ調整する。16・18・25・26はハケメ調整した後ナデる。体部内面は13が頸部以下縦方向のヘラケズリ。他は体部中位以下を縦方向のヘラケズリした後、頸部直下まで横方向のヘラケズリする。	胎土やや粗い。1～3㎜大の砂粒多量に含む。赤褐色粒子比較的多量に含む。焼成普通。淡褐色。口縁部～体部1/8遺存。
	14		口径　26.1 最大胴径 (24.7)			胎土やや粗い。1～3㎜大の砂粒多量に含む。赤褐色粒子比較的多量に含む。焼成やや悪い。器面荒れる。淡赤褐色。口縁部完存、頸部以下1/3遺存。
	15		口径　(25.4) 最大胴径 (23.3)			胎土やや粗い。1～2㎜大の砂粒多量に含む。赤褐色粒子比較的多量に含む。焼成普通。淡暗褐色。外面体部下半煤付着。口縁部1/2、体部上半1/8遺存。
	16		口径　25.2 最大胴径 (23.5)			胎土やや粗い。1～5㎜大の砂粒多量に含む。赤褐色粒子含む。焼成良好。淡褐色。外面口縁部以下煤付着。体部下半欠損。
	17		口径　26.3 最大胴径 (25.0)			胎土やや粗い。1～3㎜大の砂粒多量に含む。赤褐色粒子含む。焼成悪い。赤褐色。内外面とも風化著しい。体部下半欠損。
	18		口径　25.1 最大胴径 (24.0)			胎土やや粗い。1～3㎜大の砂粒多量に含む。赤褐色粒子比較的多量に含む。焼成普通。淡褐色。体部下半欠損。
	19		口径　(31.9)			胎土やや粗い。1～3㎜大の砂粒多量に含む。赤褐色粒子含む。焼成良好。淡白褐色。口頸部1/2遺存。
	20		口径　(22.7)			胎土やや粗い。1～4㎜大の砂粒比較的多量に含む。赤褐色粒子比較的多量に含む。焼成普通。淡褐色。口頸部1/4遺存。
	21		口径　(27.5)			胎土やや粗い。1～7㎜大の砂粒比較的多量に含む。焼成良好。淡暗褐色。口頸部1/5遺存。
	22		口径　(24.0) 最大胴径 (23.2)			胎土やや粗い。1～3㎜大の砂粒比較的多量に含む。赤褐色粒子わずかに含む。焼成良好。褐色。外面口縁部以下煤付着。口頸部1/2、体部上半わずかに遺存。
	23		口径　22.0 最大胴径 (22.3)			胎土やや粗い。1～3㎜大の砂粒比較的多量に含む。焼成普通。淡褐色、内面黒ずむ。口頸部2/3、体部上半1/5遺存。
	24		口径　(31.3) 最大胴径 (23.4)			胎土密。1～3㎜大の砂粒多量に含む。赤褐色粒子比較的多量に含む。焼成良好。茶褐色。口頸部1/8遺存。
	25		口径　(28.5) 最大胴径 (23.6)			胎土やや粗い。1～3㎜大の砂粒比較的多量に含む。焼成普通。口頸部1/8遺存。
	26		口径　(29.4) 最大胴径 (25.0)			胎土やや粗い。1～4㎜大の砂粒多量に含む。焼成普通。淡白褐色。口頸部1/4、体部上半わずかに遺存。
周溝下層	27	土師器 小型丸底壷	口径　7.8 最大胴径　8.8 器高　8.7	口縁部は上外方に直線的に開く。口縁端部は丸くおさめる。体部は扁球形。27は底部に焼成後の4×0.5～0.9㎝の穿孔が外側から施される。	口縁部内外面ヨコナデ。体部外面は胴部中位付近を縦方向、底部は斜め方向のハケメ調整。胴部内面ナデ。底部内面横方向のヘラケズリ後指頭圧痕。	胎土密。1～2㎜大の砂粒を含む。赤褐色粒子を含む。焼成普通。淡白褐色。口縁部1/5欠損。
	28		口径　(6.0) 最大胴径　7.5 器高　6.2		口縁部内外面ヨコナデ。体部外面頸部以下縦方向のハケメ調整後、胴部下位横方向のハケメ調整。体部内面ナデ。	胎土密。1～2㎜大の砂粒を含む。焼成良好。淡褐色。口縁部3/4欠損。



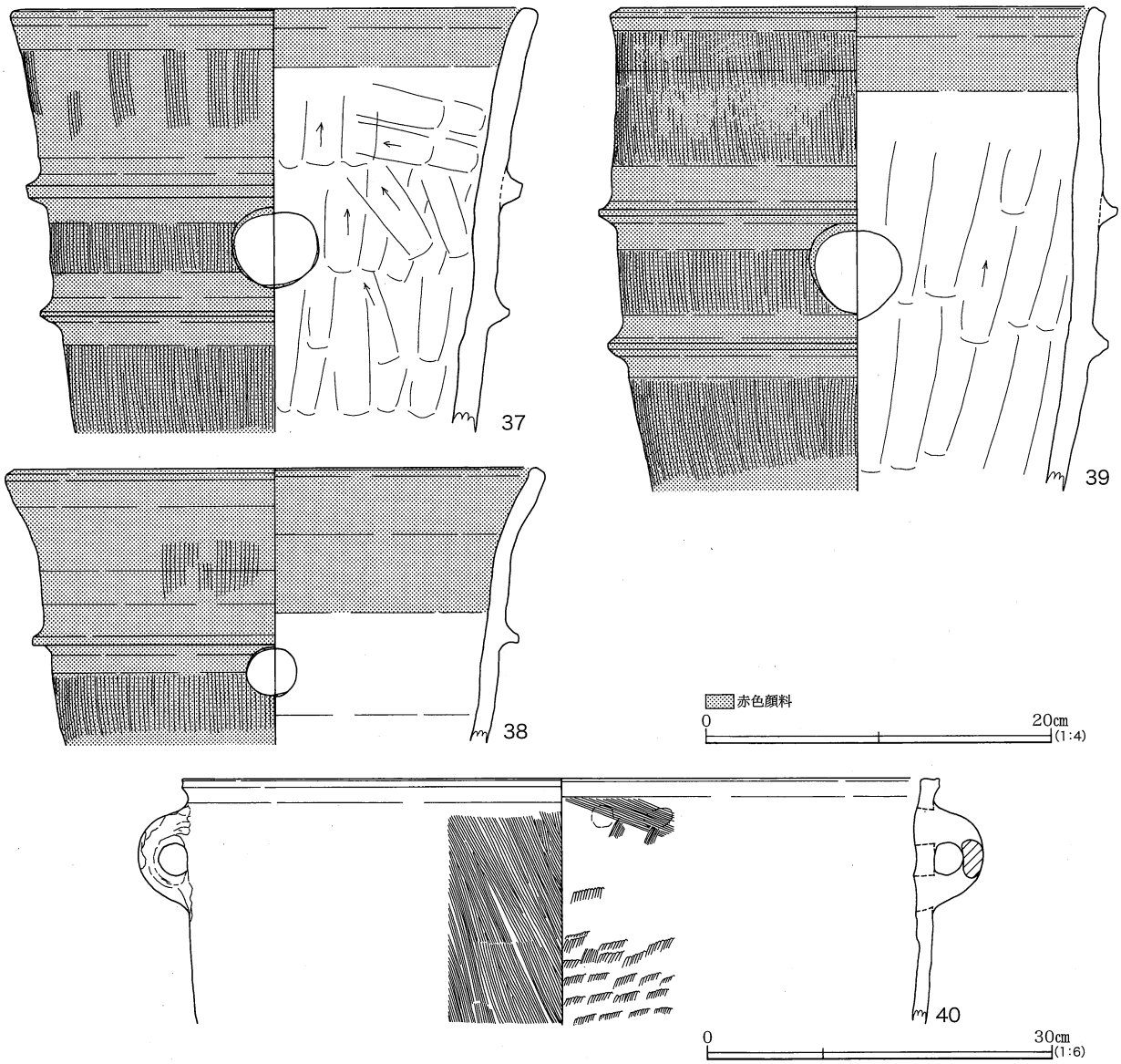
第16図　1号墳周溝上層出土遺物2



第17図　1号墳周溝下層出土遺物1

〔法量(　)は推定値〕

出土位置	No.	器種	法量(cm)	形態	手法	胎土　焼成　色調　遺存度
周溝下層	29	土師器 小型丸底壺	口径　5.6 最大胴径　6.6 器高　5.8		口縁部内外面ヨコナデ。胴部外面中位以下ハケメ。胴部内面横方向のヘラケズリ。	胎土密。1㎜大の砂粒を含む。焼成良好。淡赤褐色。体部～底部約1/3欠損。
	30	土師器 甕	口径　(16.9) 最大胴径　(25.9) 器高　(26.6)	口縁部は外反し、体部は球形。口縁端部は丸く、端部外面は強いヨコナデにより器壁を薄くする。	口縁部内外面ヨコナデ。頸部外面はヨコナデ、内面はナデ調整。外面肩部横方向のハケメ後、体部は縦方向のハケメ、底部ナデ。内面肩部以下斜め方向のヘラケズリ、肩部指頭圧痕、底部棒状工具による刺突痕。	胎土密。1～4㎜大の砂粒多量に含む。焼成良好。淡褐色。口縁部～底部にかけて1/3遺存。
	31	土師器 鉢	最大胴径　(23.0) 底径　(8.9)	体部は胴部中位で強く屈曲する扁球形で底部は平たい。	頸部内外面ヨコナデ。外面胴部中位横方向のハケメ、胴部下半縦方向のハケメ後ナデ。内面は頸部～胴部まで横方向、底部は斜め方向のヘラケズリ。	胎土密。1～3㎜大の砂粒を多量に含む。赤褐色粒子わずかに含む。焼成良好。淡白褐色。肩部～底部1/3遺存。
	32	土師器 坏	口径　(11.8)	丸みをもつ底部から、口縁部はやや内湾しながらたちあがる。端部は丸みをおびるが外側にやや面をなす。底部外面はやや凹凸が残る。	口縁部内外面ヨコナデの後、内面に横方向のヘラミガキを施し、さらに底部に放射状のヘラミガキ。外面はナデだが底部中央を一方向のヘラケズリする。	胎土密。1～2㎜大の砂粒含む。焼成良好。淡白褐色。1/2遺存。
	33	土師器 高坏	口径　(16.5)	坏部は皿状で浅い。口縁端部は小さく角張り端面は凹面をなす。脚部は上位が先すぼまりで下位が下方に開く柱状部と外方に大きく開く裾部からなる。	坏部外面縦方向のハケメ後ナデ、内面縦方向のヘラミガキ後ナデ。柱状部外面面取り状のヘラミガキ、内面絞り目残る。	胎土密。1～2㎜大の砂粒を多量に含む。焼成良好。淡褐白色。坏部1/2遺存。脚端部欠損。
	34		脚径　10.1	上位が先すぼまりで下位が外方に開く柱状部と外方に大きく開く裾部からなる。脚端部は角張る。	柱状部外面面取り状のヘラケズリ後ナデ。裾部外面ナデ、内面斜め方向のハケメ。	胎土密。1～2㎜大の砂粒を少量含む。赤褐色粒子を含む。焼成悪い。淡褐白色。坏部欠損。
	35	須恵器 坏		底部は扁平で、受部は外上方へのび、端部は鋭い。	体部内面に同心円タタキ目文残る。底部内面仕上げナデ。底部外面は時計回りのヘラケズリ。	胎土密。1～4㎜大の砂粒含む。焼成良好。淡青灰色。体部から底部1/2遺存。



第18図　1号墳周溝下層出土遺物2

〔法量(　)は推定値〕

出土位置	No.	器種	法量(cm)	形態	手法	胎土　焼成　色調　遺存度
周溝下層	36	須恵器 甕	最大胴径 (10.2)	肩部はややなだらかで、底部は丸みをおびる。肩部に2条の沈線を施文後、沈線の間に波状文をめぐらせる。頸部にも波状文めぐる。	底部外面平行タタキ。底部内面に突き込み痕残る。	胎土密。1㎜大の砂粒わずかに含む。黒色物質多量に含む。焼成良好。肩部外面及び底部内面自然釉かかる。淡灰色。頸部1/5、体部から底部1/2遺存。
	37	円筒埴輪	口径　(29.1)	2条の突帯をもつ。体部は外傾する。器壁が厚手のもの37・39とやや薄いもの38の2種類がある。38の口縁部は大きく外反する。突帯の断面は梯形である。透かしは円形で、2方に設けられ、上方の突帯の直下から穿孔される。37・39は大きく、38はやや小さい。	38は器面が荒れ、明らかではないが、他は外面は縦方向のハケメ調整をした後、突帯を貼りつけ、その後は調整されない。内面は縦方向のヘラケズリの後、口縁部をヨコナデする。37・39は外面及び口縁部内面に、38は外面及び1段目の突帯の内側まで赤色顔料が塗彩される。	胎土密。1～4㎜大の砂粒を多量に含む。赤褐色粒子含む。焼成良好。淡褐色。外面黒斑有り。基底部欠損。口縁部～体部1/2欠損。
	38		口径　(30.3)			胎土密。1～5㎜大の砂粒を多量に含む。焼成普通。淡黄褐色。内面風化著しい。体部下半欠損、体部上半2/3欠損。
	39		口径　(27.5)			胎土密。1～3㎜大の砂粒を多量に含む。赤褐色粒子含む。焼成良好。白褐色。外面に黒斑有り。基底部欠損。口縁部～体部1/3遺存。
	40	甑形土器	口径　(66.7)	大型。円筒形で下方が狭くなる。口縁端部カット。上部に縦位の環状把手を1対つける。	口縁部内外面横方向のハケ後ナデ。胴部内外面縦方向のハケ。	3㎜以下の砂粒を含む。焼成普通。橙褐色。口縁部1/9遺存。

２号住居

〔法量(　)は推定値〕

出土位置	No.	器種	法量(cm)	形態	手法	胎土　焼成　色調　遺存度
埋土	77	土師器 小型台付壷	最大胴径(9.3)	体部はやや肩の張る球形。底部は丸く閉じず、外側へ開く台部に続く。	体部外面は縦方向のハケメ。内面肩部のあたりまでナデ、それ以外は横方向のヘラケズリ。	胎土密。１～２㎜大の砂粒含む。焼成良好。橙褐色。台部内外面に白色の顔料状のもの付着。体部1/3遺存。
床面	78	土師器 甕	口径　(15.1)	口縁部は退化した二重口縁で、外反気味にたちあがり端部外側に面をなして肥厚する。端面は凹面をなす。	口縁部内外面ヨコナデ。外面頸部～肩部にかけて縦方向のハケメ後肩部横方向のハケメ。肩部内面横方向のヘラケズリを施すが指頭圧痕残る。	胎土密。１～５㎜大の砂粒を含む。赤色粒子含む。焼成良好。淡赤褐色。口縁部1/2、頸部1/8遺存。
	79	土師器 高坏	口径　(25.2)	坏部と底部との境界で屈曲し、外反する口縁部。口縁端部は面をなす。	坏部内面ヘラミガキの可能性有り。	胎土密。１㎜大の砂粒を少量含む。焼成普通。淡褐白色。坏部1/4遺存。脚部欠損。
	80	甑形土器	口径　(66.7) 底径　(17.1)	大型。円筒形で、底部がすぼまりタガ状の突帯がつく。上部に縦位の環状把手を１対、下部に横位の環状把手を１対つける。	口縁部、底部内外面ヨコナデ。胴部外面縦ハケ。胴部内面横ハケ。	５㎜以下の砂粒を含む。焼成普通。橙褐色。口縁部1/3、底部1/2遺存。

１号掘立柱建物

〔法量(　)は推定値〕

出土位置	No.	器種	法量(cm)	形態	手法	胎土　焼成　色調　遺存度
Ｐ７	81	土師器甕	口径　(17.2)	口縁部は直立する二重口縁で、口縁端部は角張り、内側に面をなす。屈曲部はヨコナデにより引き出され稜は鋭い。	口縁部内外面櫛描平行線後ナデ消し。頸部内外面ナデ。	胎土密。１～３㎜大の砂粒を多量に含む。雲母含む。焼成普通。淡褐白色。口縁部1/8遺存。

１号柵列

〔法量(　)は推定値〕

出土位置	No.	器種	法量(cm)	形態	手法	胎土　焼成　色調　遺存度
Ｐ２	82	須恵器 長頸壷		直線的に外へ開く。頸部上方に沈線が２条めぐる。	沈線を施文後、内外面ナデ調整する。体部と頸部とのつなぎ目に割れ目残る。	胎土密。１～２㎜大の砂粒わずかに含む。焼成良好。外面に灰がかかる。淡黒灰色。口縁部及び体部欠損。

２号柵列

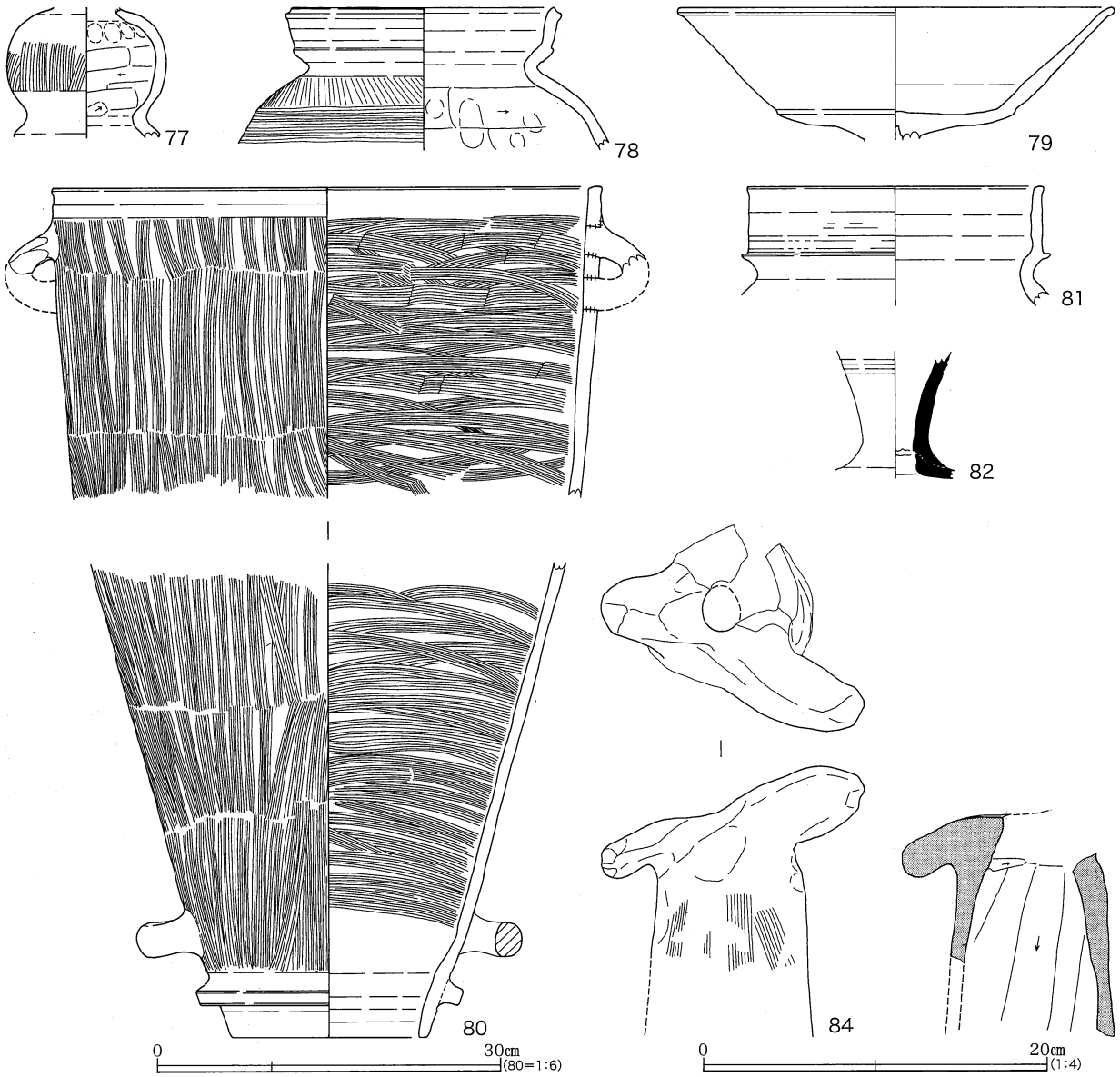
〔法量(　)は推定値〕

出土位置	No.	器種	法量(cm)	形態	手法	胎土　焼成　色調　遺存度
Ｐ６	84	土製支脚		頂部に長い把手２本、短く上下につぶれたような把手を１本もつ。頂部には焼成前の穿孔がある。体部は空洞で、わずかに下に向かって広がる。	頂部はおもに横方向のナデと指頭圧痕。穿孔部分はナデられる。体部外面は縦から斜め方向のハケメ後ナデ、内面は縦方向のヘラケズリ。	胎土密。１～３㎜大の砂粒多量に含む。焼成良好。淡白褐色から赤褐色。頂部から体部2/3遺存。

１号・２号溝状遺構

〔法量(　)は推定値〕

出土位置	No.	器種	法量(cm)	形態	手法	胎土　焼成　色調　遺存度
２号埋土	85	須恵器 蓋	口径　(7.2) 器高　1.9	天井部は扁平で、擬宝珠形のつまみをもつ。かえりは口縁端部よりわずかに突出し、太く短い。	口縁部内外面ヨコナデ。天井部外面は反時計回りのヘラケズリ、内面は仕上げナデ。	胎土密。１㎜大の砂粒比較的多量に含む。黒色物質比較的多量に含む。器面が荒い。焼成良好。淡紫灰色。1/2欠損。長頸壷の蓋か。
２号埋土最下層	86		口径　(15.0)	口縁端部は断面三角形状にわずかに下へのびる。	口縁部内外面ヨコナデ。	胎土密。１㎜以下の砂粒含む。黒色物質比較的多量に含む。焼成良好。外面光沢をもつ。淡灰色。口縁部1/8遺存。
２号埋土	87			環状つまみをもつ扁平な蓋。88の口縁部は下へのびる。87の天井部外面つまみの内側に「V」字状に２画を単位とした刺突痕がめぐる。	口縁部内外面ヨコナデ。天井部外面は反時計回りのヘラケズリ、内面は仕上げナデ。	胎土密。１㎜以下の砂粒含む。焼成やや悪い。内面淡青灰色。外面淡黒紫灰色。口縁部欠損。天井部内面時計回りの粘土痕跡を残す。
	88		口径　(14.5)			胎土やや粗。２㎜以下の砂粒含む。焼成普通。淡灰色。天井部1/5、口縁端部ほとんど欠損。
Ｐ４	89	須恵器 坏	口径　(12.3)	受部はやや外反しながら外に開き、たちあがりは内傾する。たちあがりと受部の境に強い沈線がめぐる。	口縁部内外面ヨコナデ。底部外面は反時計回りのヘラケズリ。ヘラケズリが浅く、及んでいない部分もある。	胎土密。１㎜大の砂粒わずかに含む。焼成良好。内面ボロ付着。淡青灰色。口縁部1/2、底部ほとんど欠損。



第19図　２号住居、１号掘立柱建物、１号・２号柵列出土遺物

〔法量(　)は推定値〕

出土位置	No.	器種	法量(cm)	形態	手法	胎土　焼成　色調　遺存度
検出面	90	須恵器 高台付坏	口径　(14.5) 脚径　(7.5) 器高　4.4	体部はゆるやかに湾曲しながら外へ開き、口縁部はわずかに外反する。高台は薄く、長い。	体部から口縁部、高台部分内外面ヨコナデ。底部内面は仕上げナデ。	胎土密。１㎜以下の砂粒わずかに含む。焼成普通。内面淡青灰色、外面晴青灰色。口縁部3/4、底部4/5欠損。
２号埋土下層	91	(転用硯)	脚径　(8.1)	短い高台が、外へ張り出す。坏部内面が硯に転用される。坏部内面に朱墨の痕跡が残る。	底部外面反時計回りのヘラ切り後ナデ、内面多方向の長い単位の仕上げナデ。高台部分内外面ヨコナデ。	胎土密。１㎜以下の砂粒わずかに含む。焼成やや悪い。高台部分特に軟質。淡灰色。口縁部、高台1/2欠損。
２号埋土最下層	92	土師器 皿	口径　(18.8)	体部から口縁部にかけてゆるやかに内湾する。端部外面にわずかに凹みがめぐる。	口縁部内外面ヨコナデ。体部内面器面平滑。	胎土密。焼成普通。内外面赤色顔料塗彩。口縁部1/8遺存。
２号埋土	93	竈		庇は横方向にのびる。釜孔は遺存している部分はやや直線的である。	焚口、体部内面はヘラケズリの後ナデる。庇は横方向のハケメの後ナデ。ハケメは粗い。	胎土やや粗。１～４㎜の砂粒多量に含む。赤褐色粒子含む。焼成普通。器面荒れる。淡褐色から赤褐色。
Ｐ６	95	平瓦	厚さ 1.4～1.9		凸面は格子目叩き。凹面は非常に磨滅している。	胎土密。１～３㎜の砂粒わずかに含む。焼成やや悪い。白灰色。

1号段状遺構

〔法量(　)は推定値〕

出土位置	No.	器種	法量(cm)	形態	手法	胎土　焼成　色調　遺存度
埋土	96	土師器 小型丸底壷	口径　(6.0) 最大胴径 7.5 器高　6.8	口縁部は外上方へまっすぐ開く。底部はやや扁平で最大胴径位は低い。	口縁部内外面ヨコナデ。体部内面はナデだが中位あたりに指頭圧痕残る。底部外面は基本的に一方向のハケメ。	胎土密。焼成良好。淡暗褐色。口縁部1/2欠損。体部から底部わずかに欠損。
埋土上層	97	土師器 壷	口径　(13.4)	口縁部は短く、端部は凹み、外側に肥厚する。屈曲部の稜は鈍く、上面に沈線がめぐる。体部は肩が張り、焼成後穿孔される。肩部外面に棒状工具による刺突痕２個有り。	口縁部内外面ヨコナデ。体部外面上半は横方向のハケメだが、最大胴径位は方向がやや乱れる。内面頸部から肩部のあたりまでナデで絞り目、指頭圧痕が残る。体部内面は横方向のヘラケズリだが、ケズリの位置は低い。	胎土密。１～２㎜大の砂粒含む。焼成良好。淡褐白色。外面頸部以下煤付着。口縁部1/2、頸部～体部1/3遺存。
	98	土師器 甕	口径　(12.2) 最大胴径 (18.4)	口縁部はわずかに内湾しながら外傾する。口縁端部は内外に段をもつ。体部は肩が張る。肩部外面に棒状工具による刺突痕１個有り。	口縁部内外面ヨコナデ。体部外面は最大胴径位より下は多方向のハケメ、上は縦方向のハケメの後横方向のハケメ。体部内面は頸部の下より最大胴径位まで横方向のヘラケズリ。	胎土密。１～６㎜大の砂粒を比較的多量に含む。赤褐色粒子比較的多量に含む。焼成良好。淡白褐色。外面口縁部以下煤付着。口縁部～体部1/2遺存。
	99		口径　(16.3)	口縁部は外傾する二重口縁。端部は外傾する面をなし、外側に肥厚する。屈曲部の稜はやや大きい。肩部はなだらか。	口縁部内外面ヨコナデ。頸部内面ナデで指頭圧痕残る。体部外面は斜め方向のハケメ、内面は横方向のヘラケズリで、ケズリの始まる位置は低い。	胎土密。１～３㎜大の砂粒含む。焼成悪い。淡褐白色。外面口縁部以下煤付着。口縁部～肩部1/4遺存。
	100	土師器 高坏	口径　(20.0)	浅い皿状の坏部。口縁端部は角張り、外側に面をもつ。端面は凹む。	外面及び口縁部内面は斜め方向の粗いハケメの後ナデ調整。内面体部から底部にかけては放射状のヘラミガキ。	胎土密。１～２㎜大の砂粒含む。焼成良好。淡褐白色。坏部1/5遺存。

1号貯蔵穴

〔法量(　)は推定値〕

出土位置	No.	器種	法量(cm)	形態	手法	胎土　焼成　色調　遺存度
埋土	101	弥生土器 甕	口径　(15.7)	口縁部は上外方へ開く二重口縁で、口縁端部は丸くおさめる。	口縁部外面は貝殻腹縁による平行線を施文、内面ヨコナデ。頸部外面ハケメ原体による押圧文、内面横方向のヘラケズリ。	１～２㎜大の砂粒を含む。焼成普通。淡褐白色。口縁部外面煤付着。口縁部1/4遺存。
	102		口径　23.9	口縁部はほぼ直立する二重口縁で口縁端部は角張る。屈曲部の稜は小さく丸く下垂する。	口縁部外面は貝殻腹縁による平行線、肩部外面は波状文を施文。口縁部内外面ヨコナデ。頸部内面横方向のヘラミガキ後ナデ、以下斜め方向のヘラケズリ。	胎土密。１～３㎜大の砂粒を比較的多量に含む。焼成良好。淡黄褐色。体部以下すべて欠損。
1号墳 周溝最下層	103	弥生土器 高坏	口径　19.5	坏部は丸みをもち、口縁部はゆるやかに外反する。口縁端部はやや角張る。脚部との接合は円板充填式である。	口縁端部内外面ヨコナデ。坏部内外面横方向のヘラミガキ。	胎土密。１～５㎜大の砂粒を多量に含む。焼成良好。褐色。口縁端部1/5欠損。脚部欠損。
	104		脚径　13.7	ハの字状に開き、端部はヨコナデによりさらに外反する。	端部内外面ヨコナデ。柱状部外面縦方向のヘラケズリ後ナデ。	胎土密。１～５㎜大の砂粒を多量に含む。焼成普通。淡褐色。坏部欠損。

1号土壙

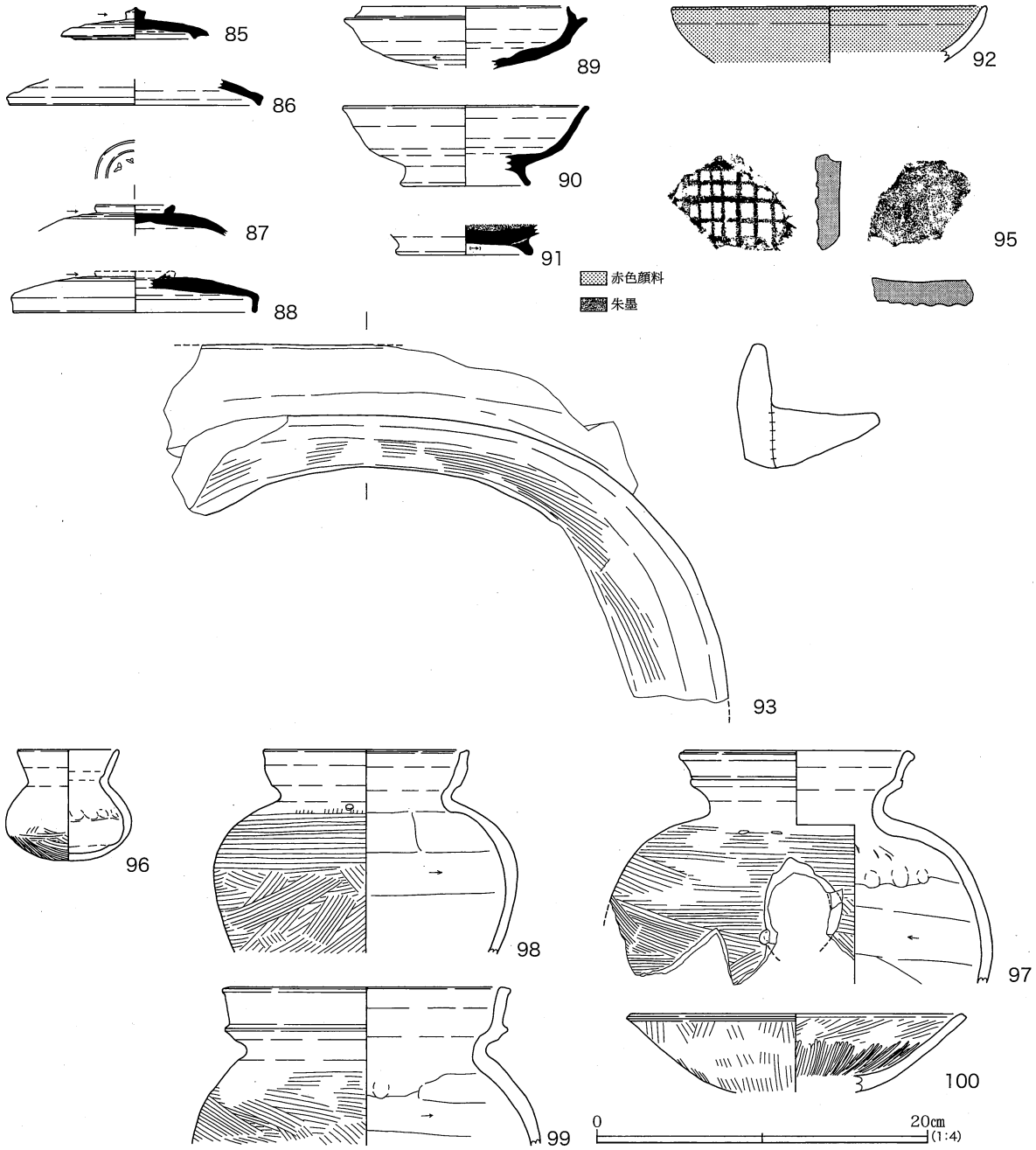
〔法量(　)は推定値〕

出土位置	No.	器種	法量(cm)	形態	手法	胎土　焼成　色調　遺存度
埋土	105	土師器 甕	口径　(16.9)	口縁部は退化した二重口縁で、口縁端部は丸くおさめる。105の屈曲部の稜は上面に沈線が入るが厚く鋭い。	口縁部内外面ヨコナデ。体部外面ハケメ調整、内面ヘラケズリ。ヘラケズリ低い。肩部内面指頭圧痕。	胎土密。１㎜大の砂粒を多量に含む。焼成良好。淡白褐色。口縁部から頸部1/5遺存。
	106		口径　(15.9)		口縁部内外面ヨコナデ。	胎土密。１～２㎜大の砂粒を含む。焼成普通。暗褐白色。口縁部～頸部1/4遺存。

土器溜

〔法量(　)は推定値〕

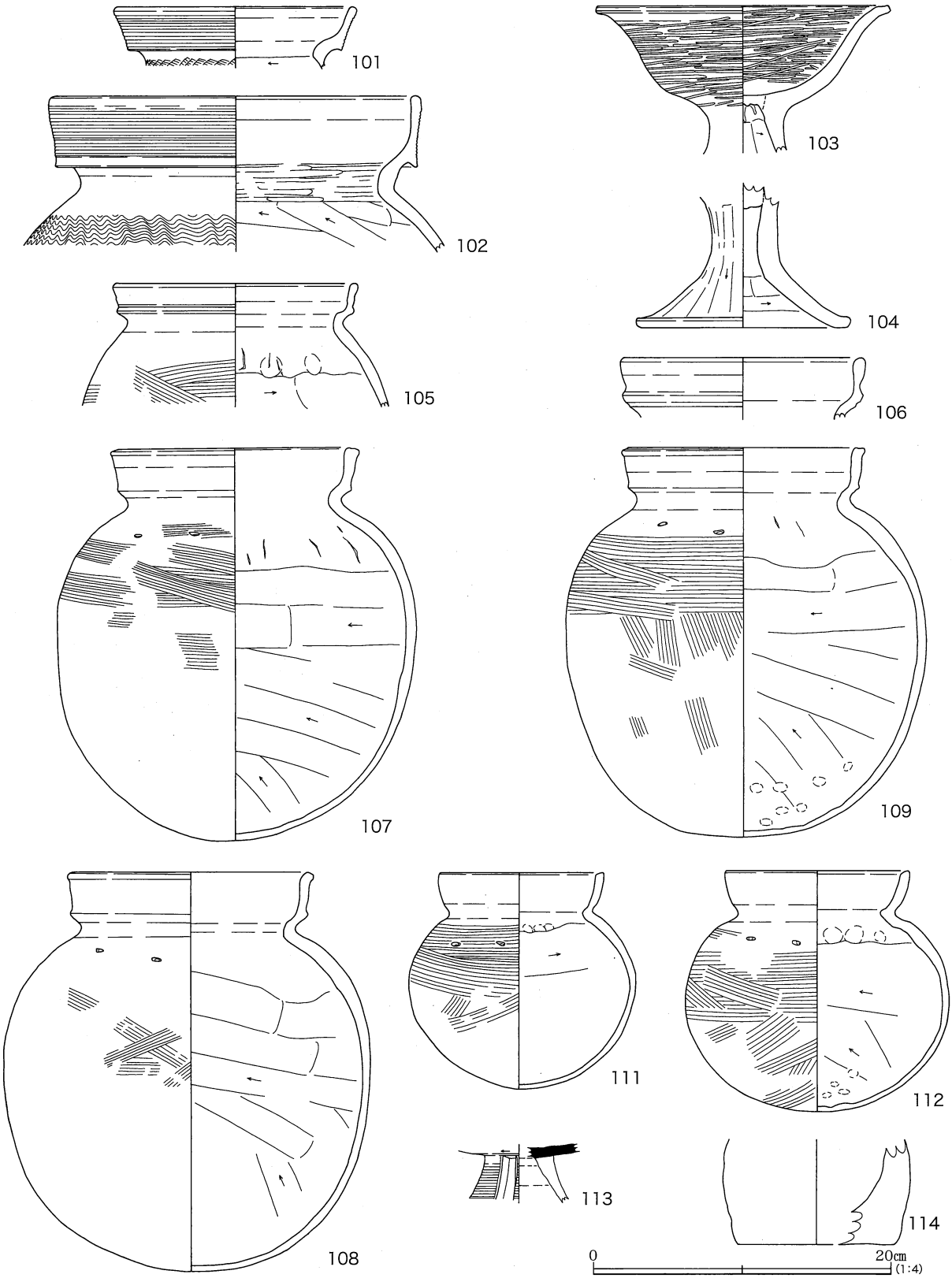
出土位置	No.	器種	法量(cm)	形態	手法	胎土　焼成　色調　遺存度
	107	土師器 甕	口　径15.4 最大胴径23.9 器　高26.6	口縁部は退化した二重口縁で107・109は外反気味にたちあがり、108はほぼ直立する。口縁端部は外側に面をなして肥厚する。107・109の端面は凹面をなす。体部はやや肩が張る倒卵形。肩部外面棒状工具による刺突痕２個有り。	口縁部内外面ヨコナデ。体部外面肩部から胴部にかけて横方向のハケメ。体部内面胴部横方向、底部斜め方向のヘラケズリ。肩部にケズリは及ばない。肩部絞り目残る。	胎土密。１～４㎜大の砂粒を多量に含む。赤褐色粒子含む。焼成普通。淡白褐色。口縁部1/5欠損。体部～底部1/4欠損。



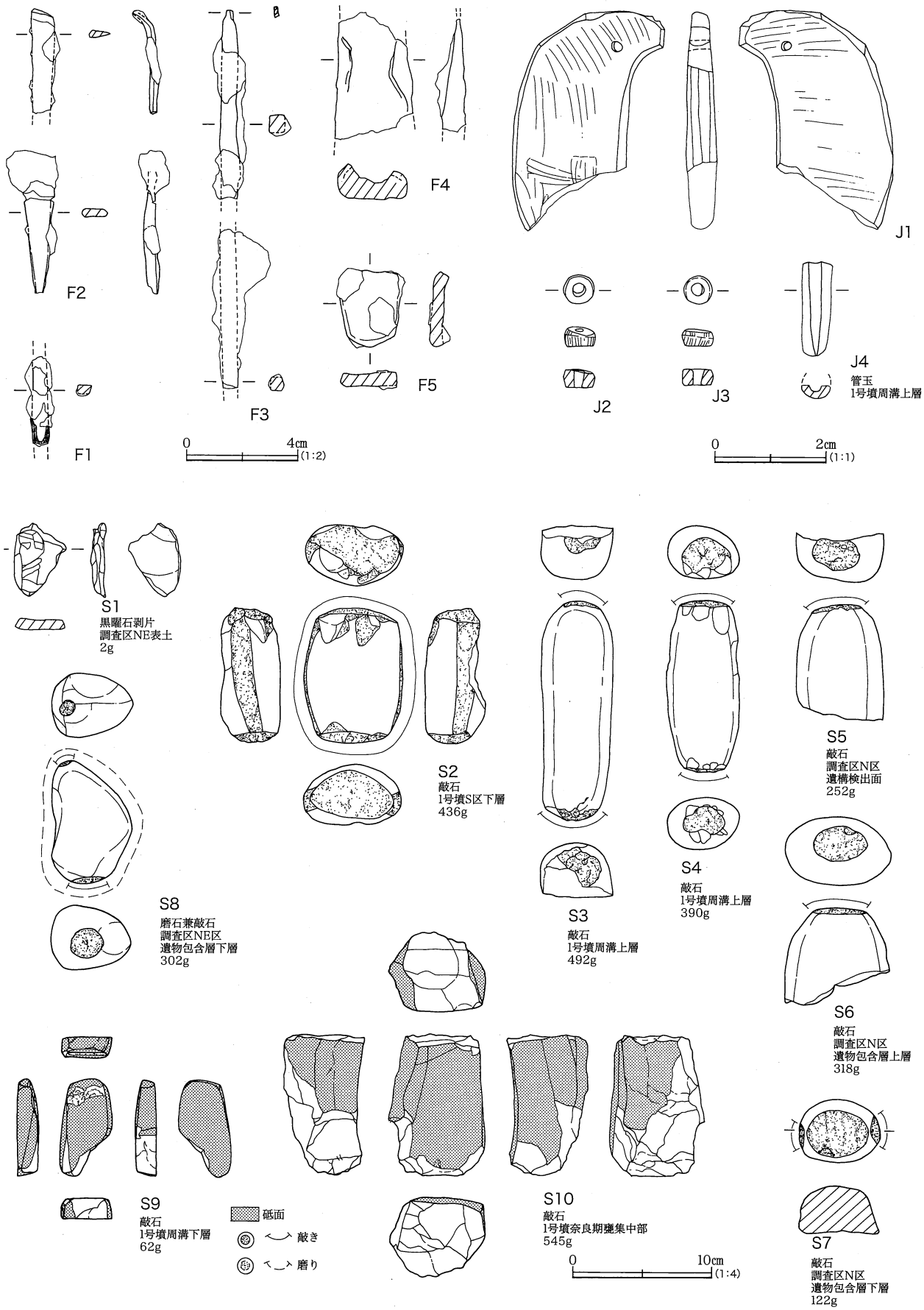
第20図　１号・２号溝状遺構、１号段状遺構出土遺物

〔法量(　)は推定値〕

出土位置	No.	器種	法量(cm)	形態	手法	胎土　焼成　色調　遺存度
	108	土師器 甕	口径　15.6 最大胴径 24.5 器高　26.8		口縁部内外面ヨコナデ。肩部内外面ナデ。胴部外面斜め方向のハケメ、内面斜め方向のヘラケズリ。	胎土密。1～2㎜大の砂粒を多量に含む。焼成普通。淡白褐色。底部わずかに欠損。
	109		口径　17.1 最大胴径 24.2 器高　(26.3)		口縁部内外面ヨコナデ。外面肩部横方向、胴部斜め方向のハケメ。内面胴部横方向、底部斜め方向のヘラケズリ。肩部にケズリは及ばない。底部ヘラケズリ後圧痕。	胎土密。1～3㎜大の砂粒を多量に含む。赤褐色粒子含む。焼成普通。淡白褐色。底部1/2欠損。
	111		口径　10.8 最大胴径 15.1 器高　(14.7)	小型。口縁部は内湾気味に外反するくの字口縁で、口縁端部は内側に面をなす。体部球形。肩部外面棒状工具による刺突痕２個有り。	口縁部内外面ヨコナデ。外面肩部から胴部にかけて横方向のハケメ。	胎土密。1～2㎜大の砂粒多量に含む。焼成普通。淡褐色。体部外面煤付着。底部わずかに欠損。



第21図　1号貯蔵穴・1号土壙・土器溜、遺構外出土遺物



第22図　鉄製品・玉類・石製品

〔法量(　)は推定値〕

出土位置	No.	器種	法量(cm)	形態	手法	胎土　焼成　色調　遺存度
	112	土師器 甕	口径　12.2 最大胴径 17.7 器高　16.2		口縁部内外面ヨコナデ。外面肩部から胴部にかけて横方向、後胴部以下斜め方向のハケメ。内面胴部から底部にかけて斜め方向のヘラケズリ。頸部指頭圧痕。底部棒状工具による圧痕。	胎土密。1～2㎜大の砂粒を含む。赤褐色粒子わずかに含む。焼成良好。淡褐色。体部外面煤付着。完形。

遺構外

〔法量(　)は推定値〕

出土位置	No.	器種	法量(cm)	形態	手法	胎土　焼成　色調　遺存度
調査区NW区	113	須恵器 高坏		脚の基底はやや太い。透しは三方。	坏底部内面に同心円タタキ目文残る。坏底部外面は反時計回りのヘラケズリ。脚部外面にはカキ目が施される。透しには面取りが見られる。	胎土密。1㎜大の砂粒わずかに含む。焼成良好。淡灰色。坏部分ほとんど欠損。脚部上半部分1/5遺存。
調査区N区	114	土師器 鉢	底径　(10.5)	底部は平坦で、体部は上方にたちあがり、やや内湾する。器壁は厚い。	底部に板目残る。基本的に内外面ともナデ調整。	胎土やや粗い。1～4㎜大の砂粒多量に含む。赤褐色粒子多量に含む。竈、土製支脚などの胎土に似る。焼成普通。淡褐色。体部から底部1/4遺存。

Ⅳ　まとめ

各遺構の時期　出土した遺物から各遺構の時期についてふれる。まず、1・2号溝状遺構は、須恵器坏89の破片が2号溝状遺構（新）に伴うと考えられるP4から出土していることから7世紀前半には存在し、2号溝埋土の遺物から遅くとも8世紀前半には埋まり始めたと考えられる。出土した遺物の中に9世紀後半以降の遺物はなく、廃絶はその頃と考えられる。

柵列は、ほぼ同じ方向であるため1号・2号とも大きく時期差はなく、ピット内出土の須恵器長頸壺82の存在から7世紀後半代の遺構と考える。1号住居は2号柵列に切られること、住居埋土下層から奈良期甕の小片が出土していることからそれ以前の7世紀前半代が考えられる。

1号墳は、供献状態で出土した遺物がなく厳密には決められないが、周溝下層出土の土師器甕30・須恵器坏35・須恵器甑36などから6世紀前葉に築造されたと考えられる。1号墳墳頂部にある1号土壙からは、1号墳周溝下層とほぼ同時期の遺物が出土している。位置、形態から1号墳に伴う遺構とは考えにくく、1号墳築造時まで存続していた遺構と考えられる。2号土壙は、1号墳の墳丘裾部分・周溝を削るように造られているため、1号墳より後出する遺構である。1号墳周溝内の奈良期甕集中部は周辺の須恵器**2**・**3**などにより7世紀後半代に位置付けられる。周溝上層の出土遺物の中には須恵器坏**5**など8世紀前半に降ると考えられるものもあり、明確な集中部をもたない周溝上層の奈良期甕・竈などは7世紀後半以降8世紀前半代に遺棄されたと考えられる。

2号住居・1号段状遺構・土器溜は5世紀後半代、掘立柱建物は古墳時代初頭、貯蔵穴は弥生時代後期後葉から弥生時代末にかけての土器が出土している。3号・4号土壙の埋土は黒色土のみでⅡ・Ⅱ′層の茶褐色土系の土はみられなかった。黒色土の上のⅡ′層は土器溜の存在から少なくとも5世紀後半以前の堆積であり、3号・4号土壙はそれよりさらに以前の遺構である。

祭祀遺物について　今回の調査で1号墳周溝上層から土製馬形4・猪形1・不明動物形1・土玉1・手捏土器48が出土した。周溝上層には7世紀後半以降8世紀前半の遺物が含まれる。祭祀遺物は周溝下層からは出土せず、同様の時期が考えられる。出土状況にはまとまりがみられず、置く・捧げるなどの行為を行った「場」や、その「状況」は今回の調査では推定できなかった。また、出土状況にまとまりがみられなかったことと関連するのか、

出土した馬形の中でも目鼻を表現するもの43・44としないもの41・42の違いが認められる。

周辺の祭祀遺物出土遺跡の状況は、まず南隣の丘陵上に位置するクズマ遺跡第１次調査[註1)]では、９基の古墳が調査され、丘陵の先端部にある３基を除く６基の古墳周溝内などから土製馬形・土玉・手捏土器などが出土している。丘陵頂部にある７号墳・８号墳が量的に他よりも多く、７号墳では周溝東側の埋土中に土製馬形６・手捏土器・奈良期甕・竈・土製支脚の集中部分がみられ、それらの中から７世紀後半の須恵器が出土している。また、７号墳と８号墳の間の平坦地（空白地）にも祭祀遺物の集中がみられる。同一丘陵の先端部に位置するイガミ松遺跡からは合計217点もの土製人形・馬形・竈形・有溝円板・器財形、手捏土器などが採取されている。東隣の丘陵上には西山遺跡[註2)]があり、６世紀代の竪穴式住居内から馬形・土製鈴が出土しているが、古墳群からは祭祀遺物は出土していない。さらに東隣に存在する谷畑遺跡[註3)]には浅い谷部分に人形・馬形・不明動物形・鉤形・手捏土器などが集中して置かれたような状況で出土し、６世紀後半の時期が与えられている。それらの集中部から少し離れて、７世紀前半の土器と一緒に鏡形・土玉・手捏土器・甕・竈・土製支脚のやや粗な集中部分が検出された。上神宮ノ前遺跡[註4)]では、浅い谷部分に人形・馬形・鏡形・鈴・土玉・手捏土器・竈・甕・土製支脚などが廃棄されたような状態で出土している。猫山遺跡[註5)]では、古墳周溝上面から手捏土器６点が出土している。

今回の調査で出土した土製品の種類は、イガミ松遺跡・谷畑遺跡・上神宮ノ前遺跡などにみられるような多種類ではなく、馬形・手捏土器を中心とした数種類に限定されているという点でクズマ遺跡１次調査に似る。近隣の丘陵上からの出土であり、１次と２次の出土の遺物は同様の時期が考えられている。しかし、クズマ遺跡１次調査出土の馬形はいずれも胴部が太く、馬具を表現しているのに比べ、２次調査出土のものは小型で、馬具が表現されないなどの違いが認められる。また、今回の調査では人形と思われる個体はなく、猪形が出土しているなど組成も若干異なる。

時期、立地、限定された土製品の使用などの類似から、同質（種）の祭祀を復元することが許されるなら、その祭祀は、その場・その度ごとに器種構成・細部の表現などの幅をもち得る様式であるということができる。

西山遺跡や猫山遺跡の例にみられるように、周辺の他の丘陵上にはクズマ遺跡と同様の祭祀遺物はみられない。なぜこの丘陵がそのような特色を持つのか、今回の調査だけでは明らかにできないが、地形的にみると、蜘蛛ヶ家山と四王寺山に挟まれた、上神地区の平野部の端に位置する、という特徴をあげることができる。

また、２次調査では１号墳周溝上層から、多量の奈良期甕・竈・土製支脚が出土した。これらの遺物は、同時期の１号・２号溝状遺構からは、底面の土壙内から滑石製臼玉Ｊ３が出土しており、周囲の古墳群の埋葬施設さえも削平している可能性があることから、古墳の被葬者に対する新たな供献という性格ではないと考えられる。

先述したクズマ遺跡１次、谷畑遺跡、上神宮ノ前遺跡などでも竈・甕・土製支脚が多量に出土している。竈については、出土例の多くが壊れた状態であることは、民俗例から「カマドは天帝の眷属で、毎年大晦日にその家の功罪を報告する役目があるため、カマドを壊し、役割を果たせなくするためではないか」とされている。今回の調査で出土した竈も、接合できた破片がわずかしかないほどに破砕されていた。

今回の調査では、竈などの出土の他に、甕・土製支脚のみの、竈を持たない集中部（１号墳周溝内奈良期甕集中部）を検出した。集中部は器種を選択し１箇所に置くという意図的な行為の所産である。しかし、他の３遺跡の例も今回の調査でも、竈と甕・土製支脚はそれぞれ分かれて出土しているのではなく、同様に破砕され、出土している。出土した器種はいずれも土師器の煮沸用具であり、他の供膳具はわずかしか供伴していない。そのことから、竈に込められる祭祀的な意味合いと、甕・土製支脚の出土する意味とを別系統に考えるのではなく、同じ火の神（カマド神）に対する祭祀であると考えたい。その中で、甕集中部は、単に使用時のセット関係を表しているだけなのかもしれないが、現段階では、煮沸用具の破砕遺棄とは違った「かたち」の存在を示すものとし

て理解してはどうだろうか。

１号・２号溝状遺構について　１号・２号溝状遺構底面の土壙列は「凹凸状波板」と呼ばれる、道状遺構にともなう安定した路面確保のための基礎工事だと考えられているものによく似る。２号溝の硬化した埋土はまさに「踏みしめられた」ような硬さであった。さらに、特に２号溝（新）の土壙列にみられるように、溝状遺構の底面が比較的硬いⅦ層白灰色粘質土の部分には土壙列は設けられず、軟質なⅥ′層黄褐色土の部分には設けられている点は、土壙列の持つ路面強化という目的に矛盾しない。土壙の具体的な目的は①土壙を人為的に硬く埋め戻しその上面を路面として使用する。②掘られた土壙を階段状に利用する。などが考えられている。しかし、今回の調査区内では溝状遺構底面（土壙上面）に強い硬化（①）は認めらない。また、土壙列の中には底面もしくは埋土下層と上層の境目に土器・石の小片が敷いてあるような土壙があり、その面を人が足を掛ける面（②）と考えたとしても、土壙の断面形は人がつまずかずに歩けるほど緩やかなものではないなど、道路遺構と考えるにはやや不自然な点もある。この溝状遺構は今回の調査区内では一部分のみを確認したにすぎず、その追求はさらに資料の増加を待って検討したい。

現在上神地区を谷沿いに走る県道倉吉・由良線が開通する明治時代以前は、倉吉方面からの道が今回の調査地とイガミ松遺跡の所在する丘陵を登り、山越えで倉吉市穴沢へ通じていたということである。そのことが祭祀遺物の出土や、溝状遺構の性格と直接関連づけられるわけではないが、興味深い事実である。土製品（いわゆる祭祀遺物）を用いた祭祀と煮沸用具を用いた祭祀との関係、その祭祀行為の具体的な様相、斎場の復元、また溝状遺構の性格など、残された問題は多いが、他の調査例との比較とその詳細な検討も含め今後の課題としたい。

註

1　眞田廣幸　「鳥取県クズマ遺跡」『日本考古学年報39』1986年度版　日本考古学協会　1988

2　森下哲哉　『四王寺遺跡群　西山遺跡・桜木遺跡発掘調査概報』　倉吉市教育委員会　1985

3　土井珠美　「谷畑遺跡」『倉吉市内遺跡群分布調査報告書Ⅱ』　倉吉市教育委員会　1985

4　加藤誠司　『上神宮ノ前遺跡発掘調査報告書』　倉吉市教育委員会　1999

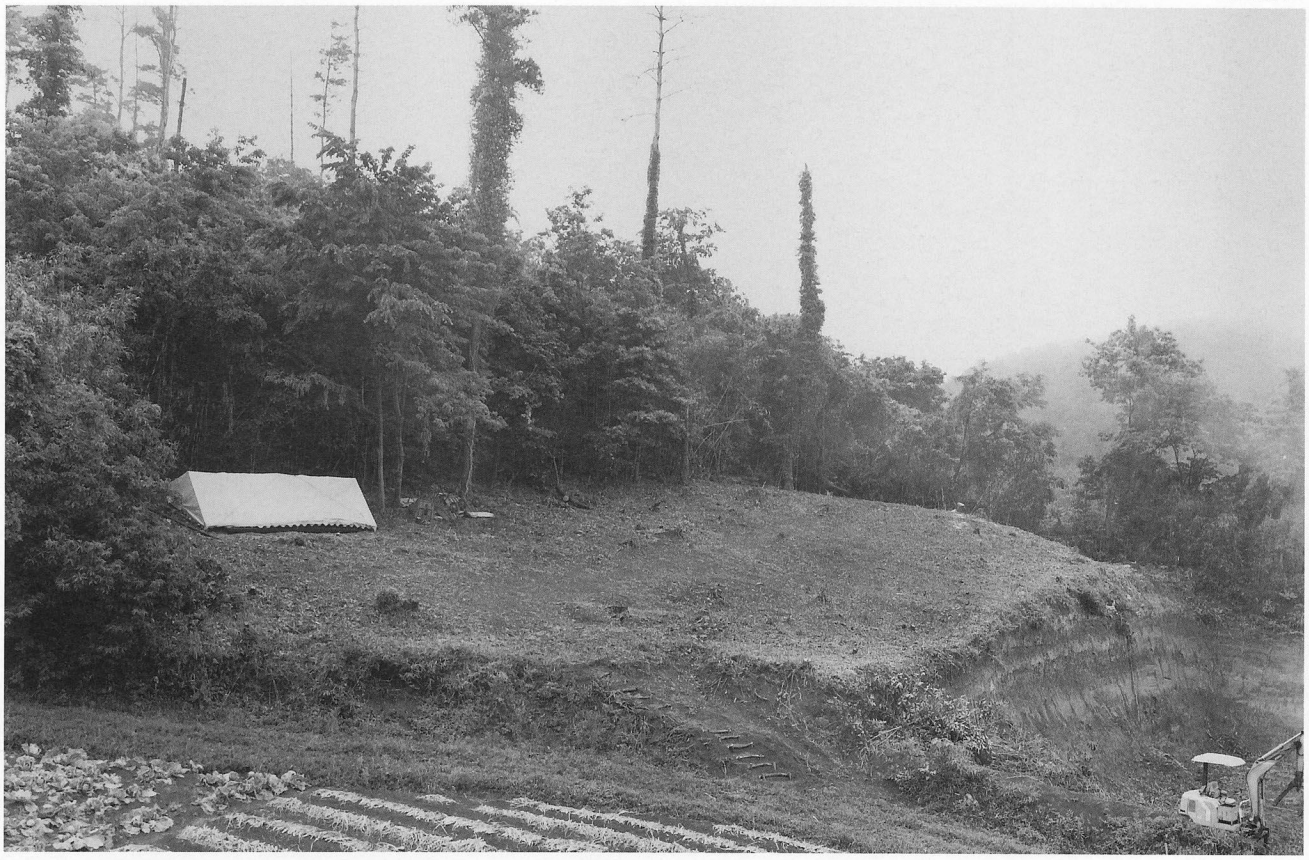
5　根鈴輝雄・竹中孝浩　『猫山遺跡第４次発掘調査報告書』　倉吉市教育委員会　1993

参考文献

根鈴輝雄　『特別展　まつりの造形－古代形代の世界－』　倉吉博物館　1997

稲田孝司　「忌の竈と王権」『考古学研究97』第25巻　第１号　考古学研究会　1978

『新編　倉吉市史』第１巻古代編　倉吉市　1996



△調査前全景（南から）

▽調査後全景（南から）

図版2

△１号墳(南西から)

▽１号墳周辺(南西から)

奈良期甕集中部(南西から)

(南東から)

(北東から)

図版4

不明土製品（46）出土状況

（東から）

土製馬形（41）出土状況

（北東から）

土製馬形（43）・猪形（45）

出土状況　（南東から）

土製紡錘車（49）出土状況

（南西から）

1号墳北断面（南西から）

調査区北壁（南東から）

図版6

1号住居（南から）

2号住居（南東から）

貼床（南東から）

1号掘立柱建物

1号・2号柵列

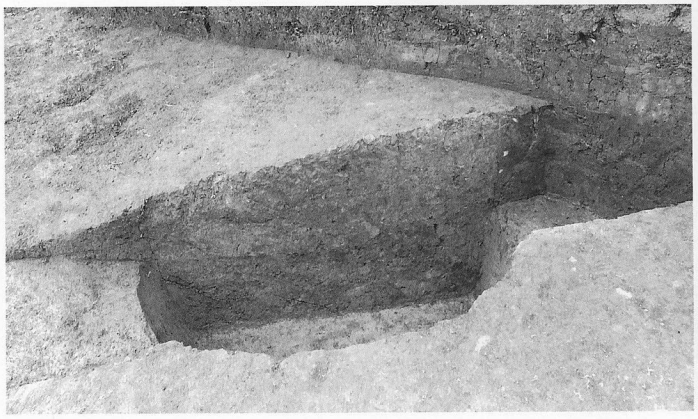
（東から）

1号住居・2号柵列検出面

（南から）

2号柵列◁P6断面（東から）

▷P5断面（東から）



図版8

1号・2号溝状遺構検出面

（北東から）

（北西から）

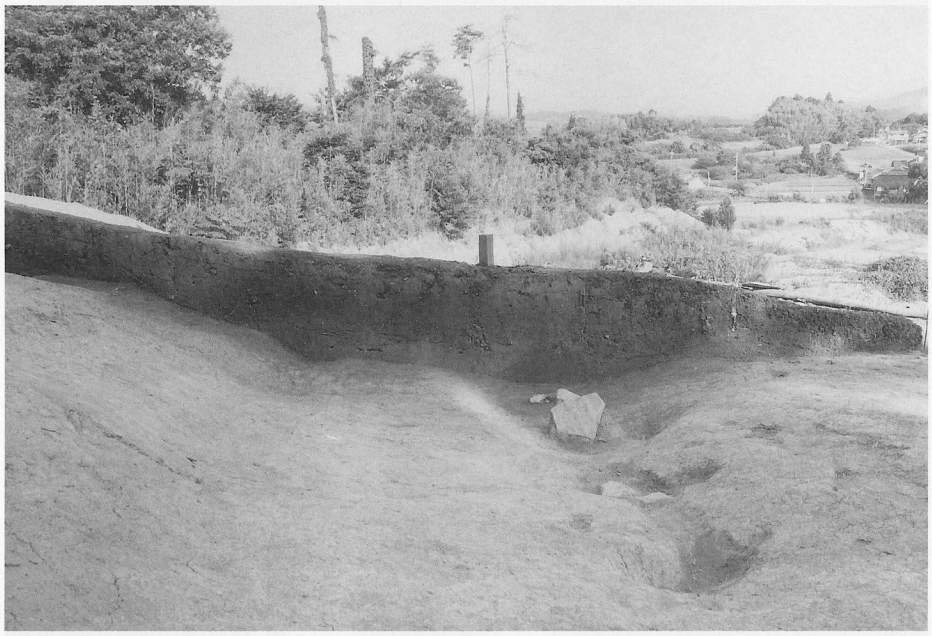
完掘

（北西から）

1号・2号溝状遺構断面

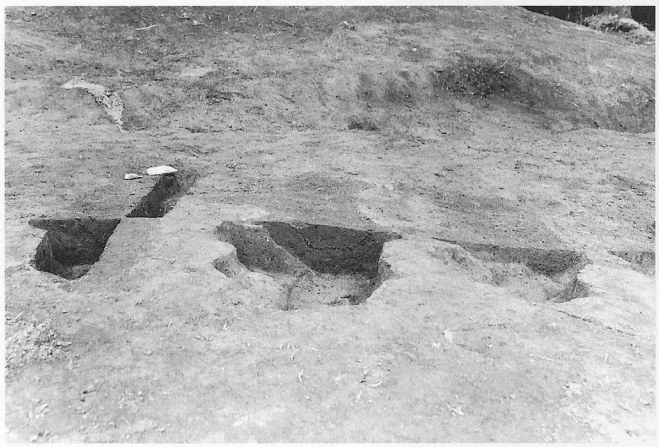
（南東から）

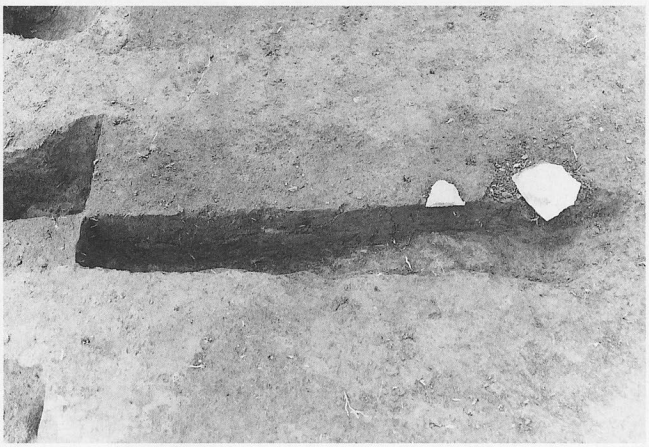
（北西から）



◁P3・4・5断面　（南西から）

▷P5断面　（南東から）





図版10

３号溝状遺構断面　（南東から）

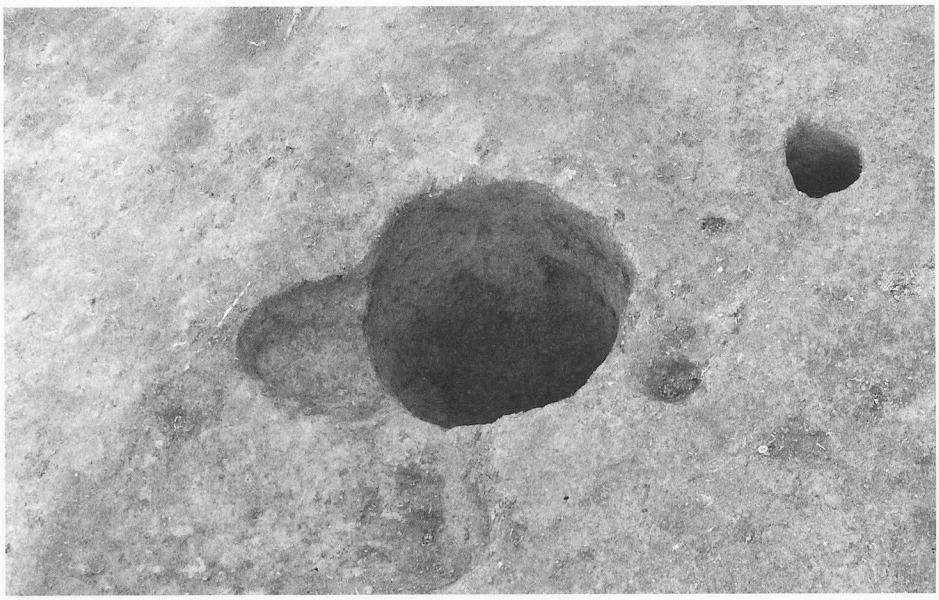
１号段状遺構　（北西から）

断面　（北東から）

1号貯蔵穴　（南西から）

（西から）

1号土壙　（北東から）



図版12

２号土壙　　（東から）

断面　　（東から）

３号土壙半裁　　（南西から）

4号土壙　（北西から）

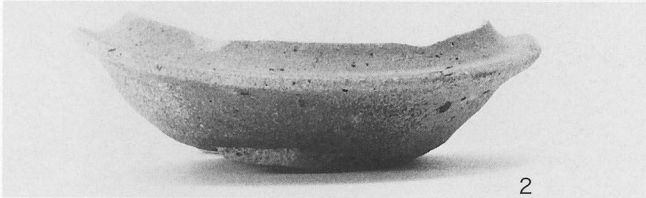
土器溜　（南東から）

（南東から）

1

6

8


2

4

14

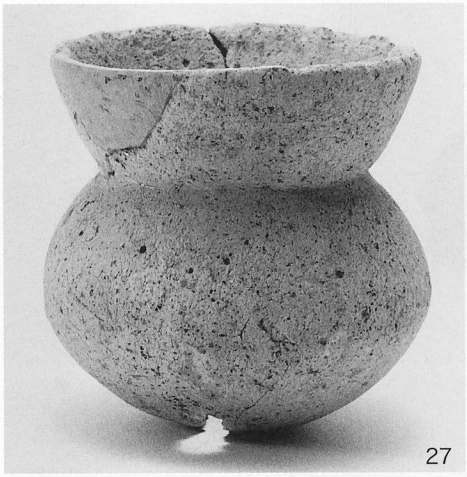
11

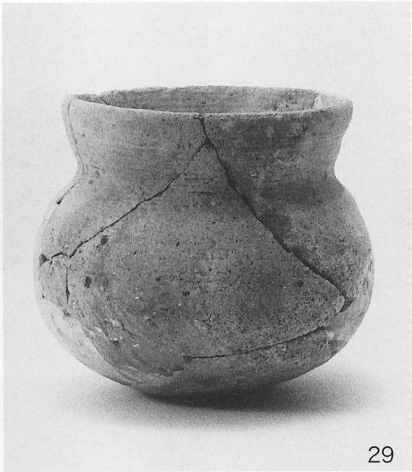
16

9

10

18


27

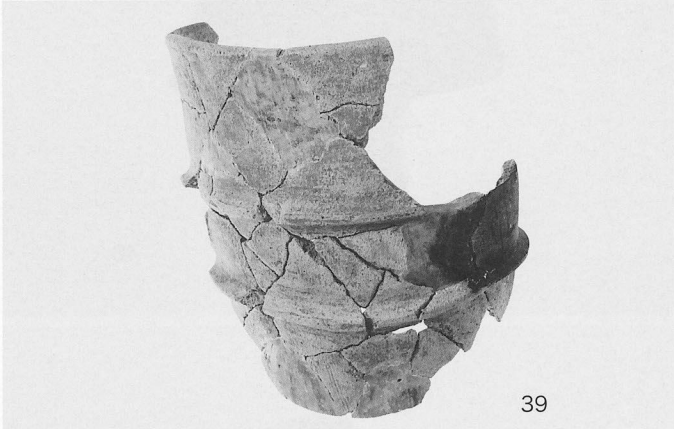

29

30

31

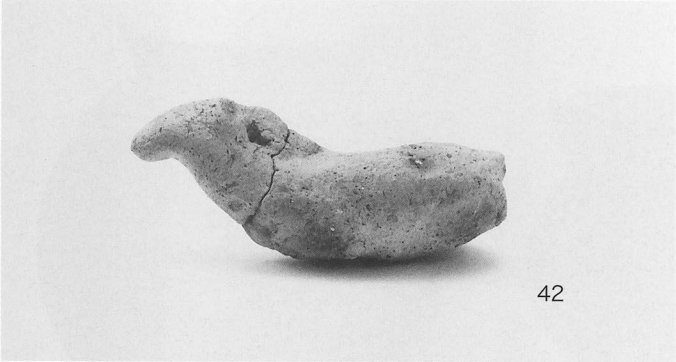
36

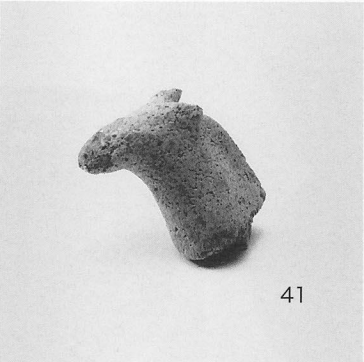
32

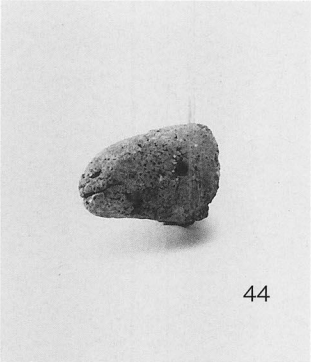

39

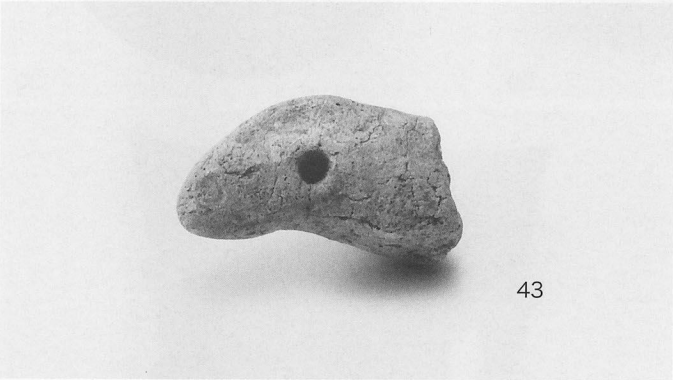
33

40


42


41


44


43

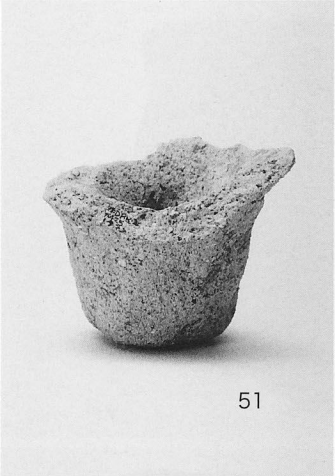
45

46

49

47

48


51

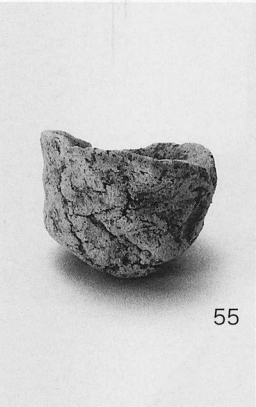
52

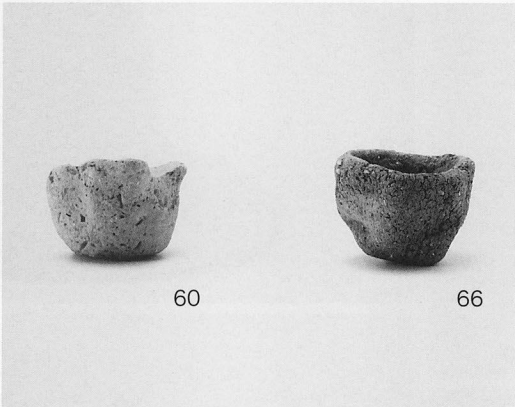
53

57

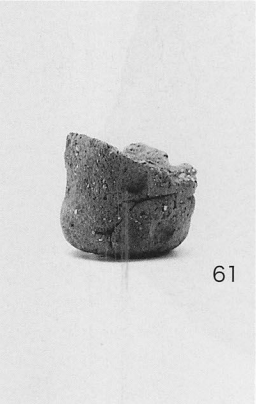
54 56

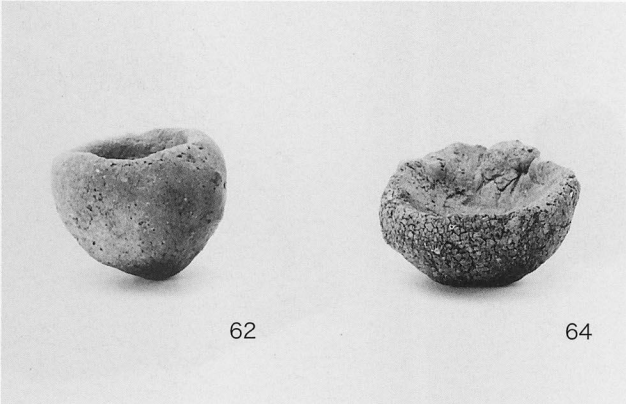
59 58

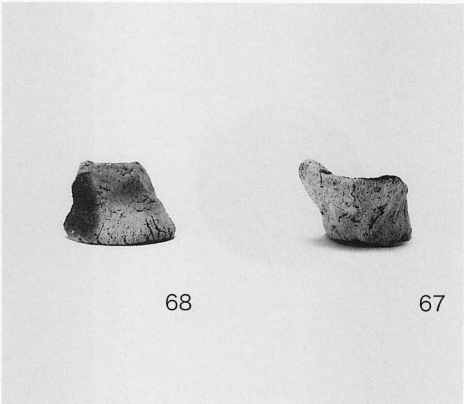

55

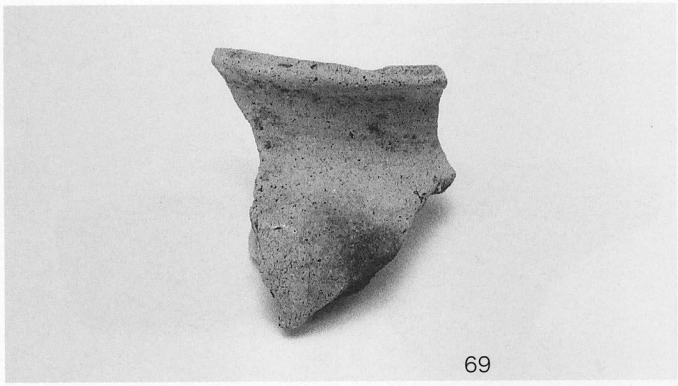

60 66

65 63


61


62 64


68 67


69

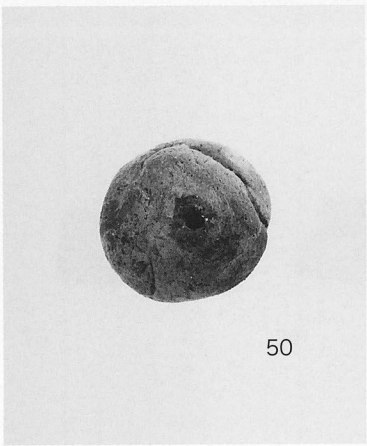
71

73

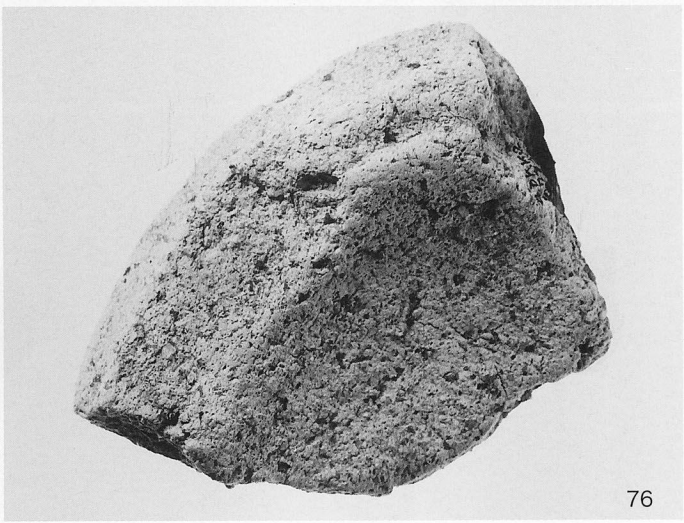
72

70

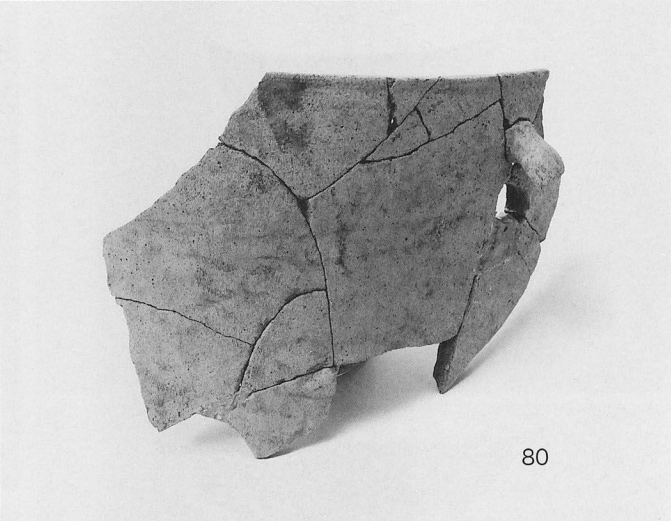
74


50

75


76

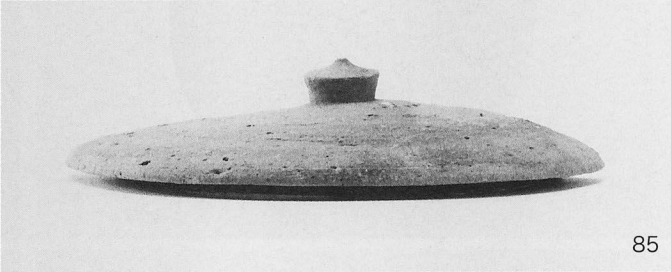
79

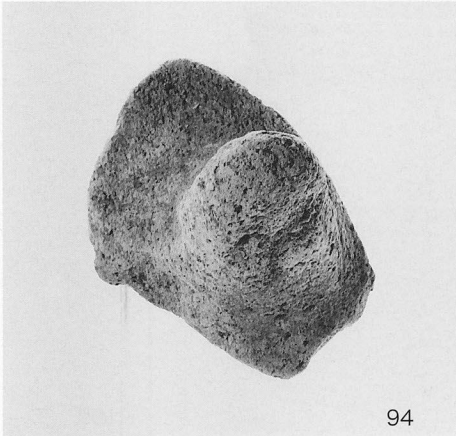

80

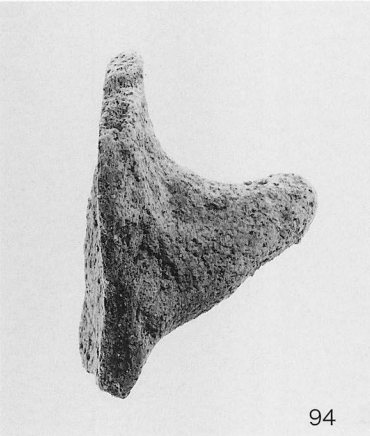
83

80

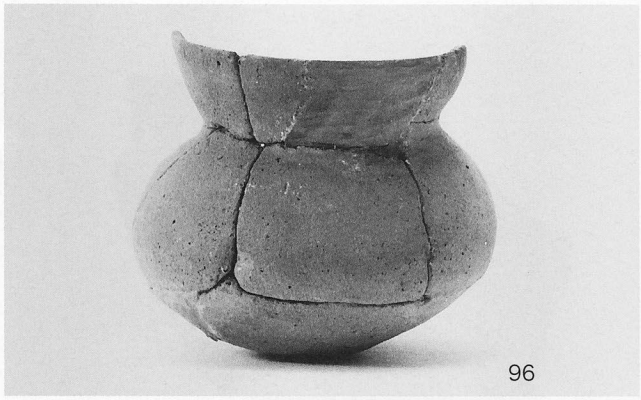
93


85


94


94

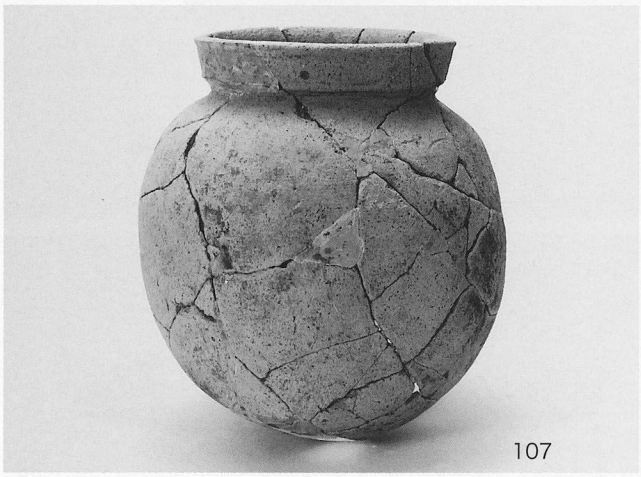
84


96

97

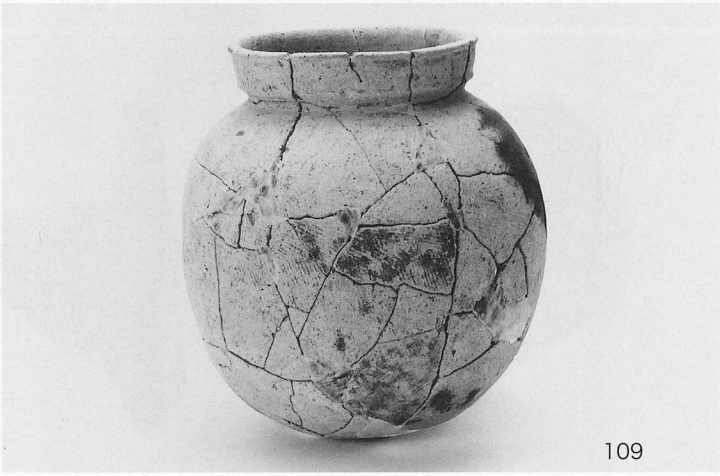
99

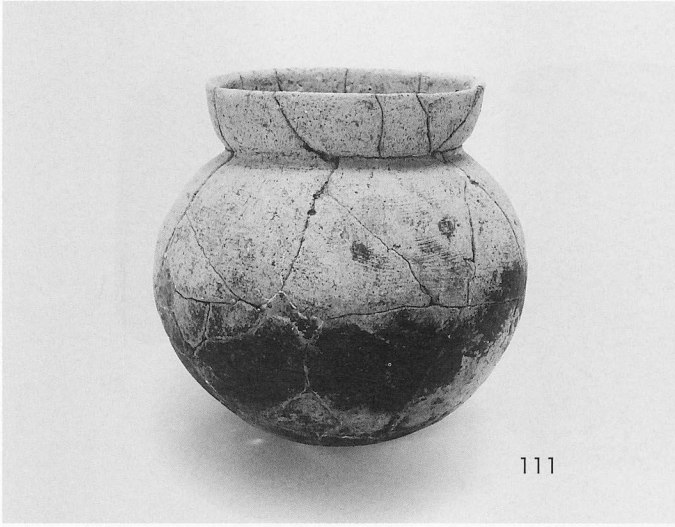
102


107

103

108

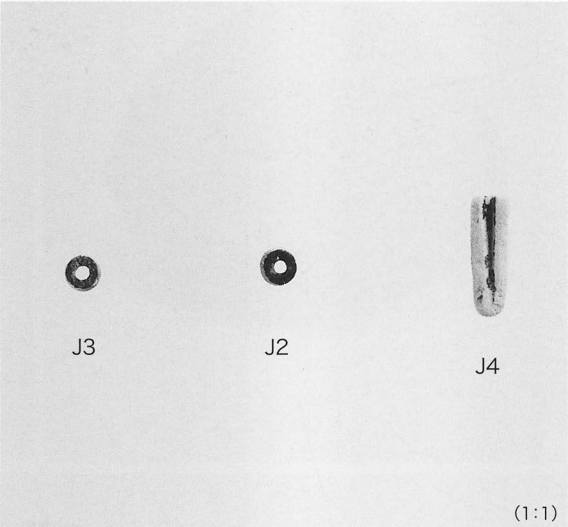

109

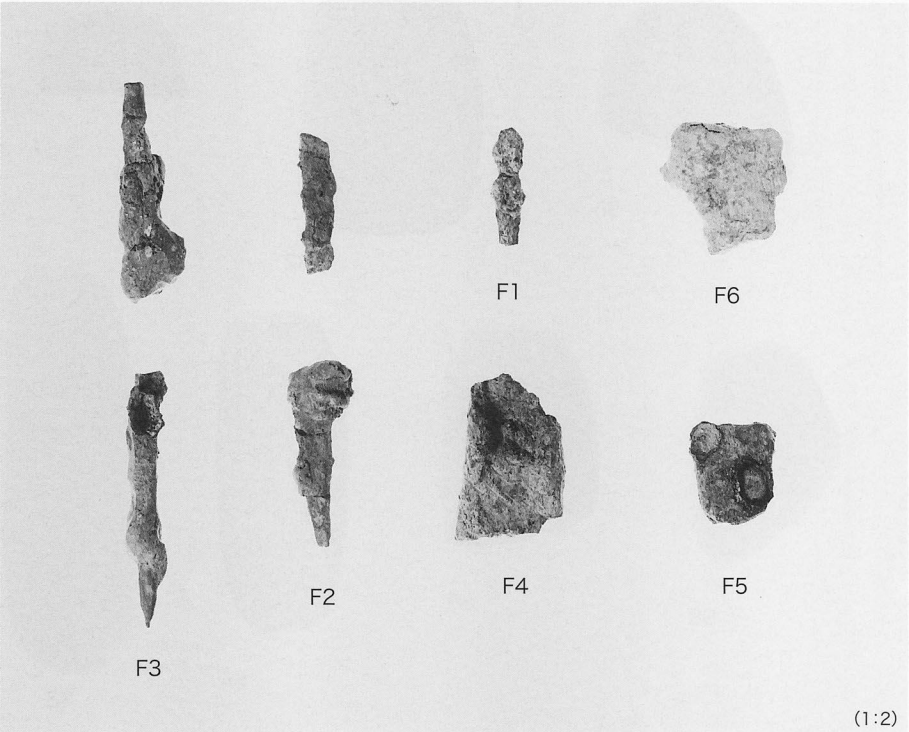

111

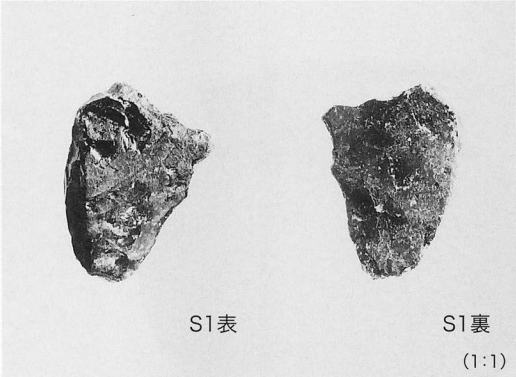
112

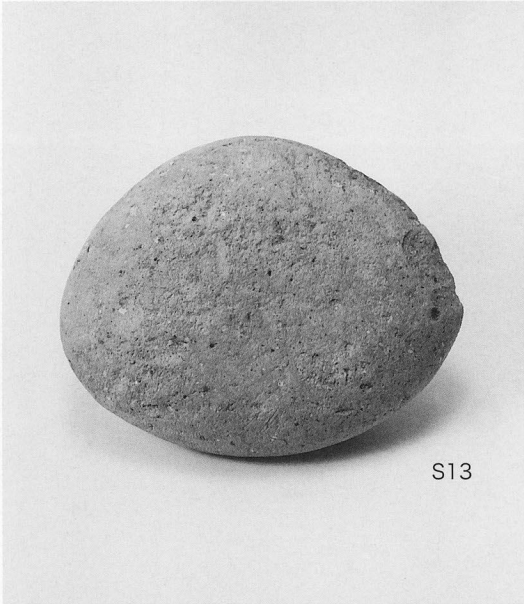
110

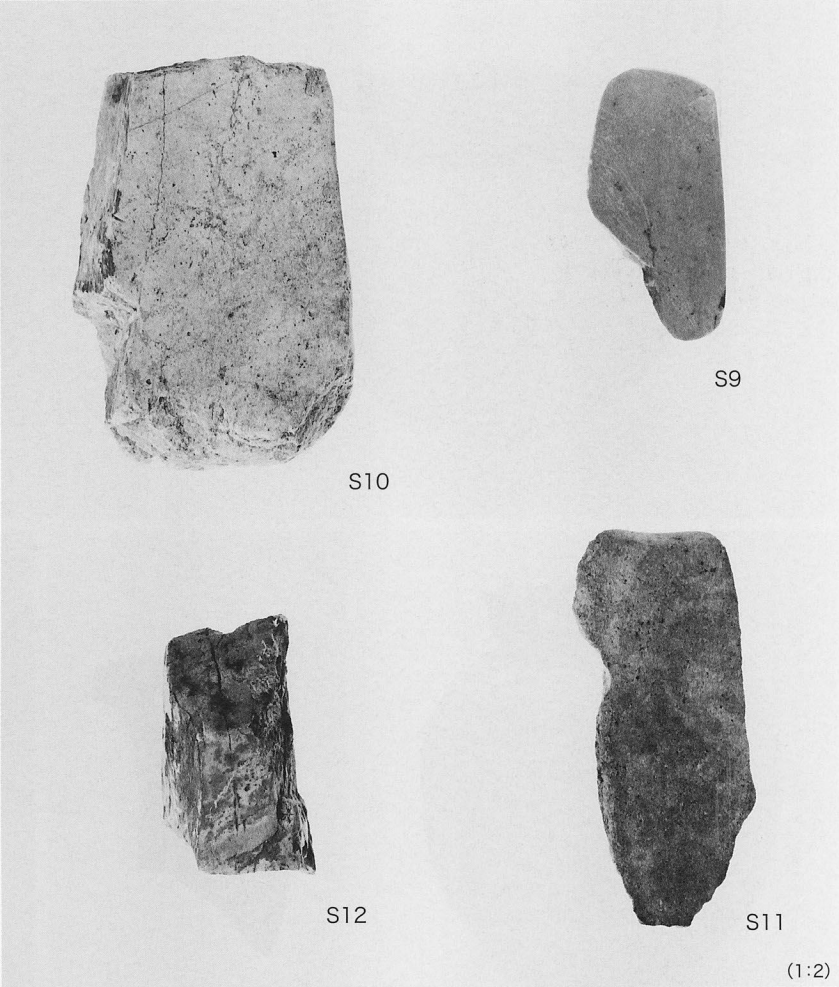
J1
(1:1)

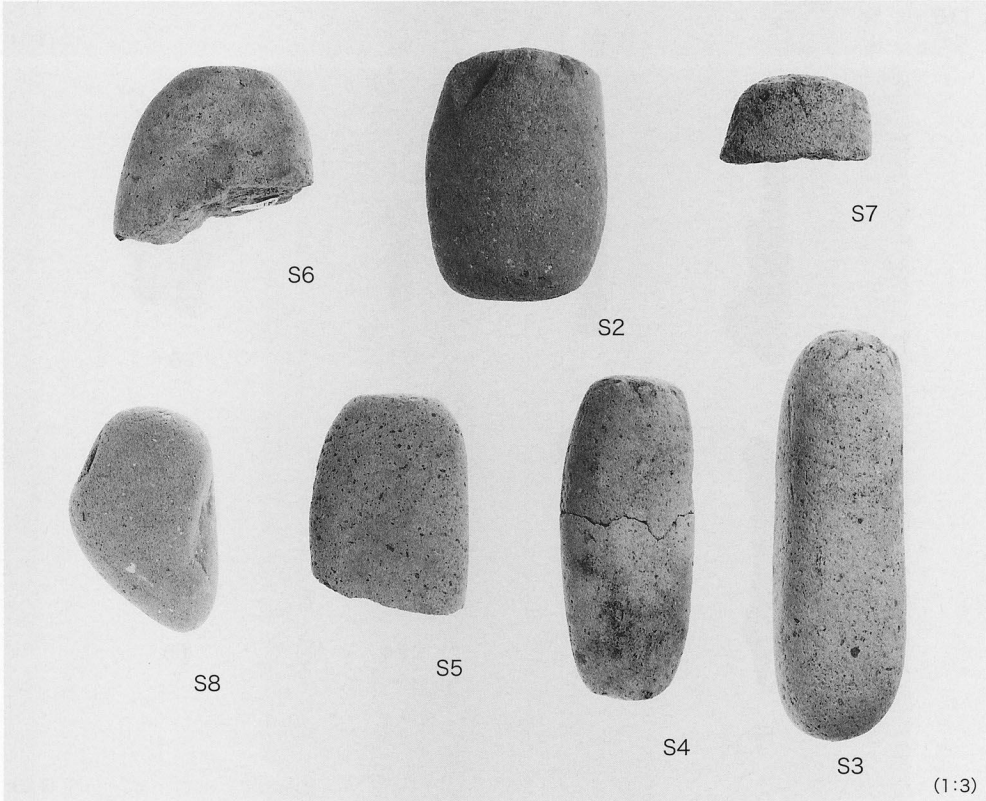

J3
J2
J4
(1:1)


F1
F6
F2
F4
F5
F3
(1:2)


S1表
S1裏
(1:1)


S13


S10
S9
S12
S11
(1:2)


S6
S2
S7
S8
S5
S4
S3
(1:3)

210.2
Kur
(104)
図書館

報告書抄録

書名	クズマ遺跡第２次発掘調査報告書
副書名	―――
巻次	―――
シリーズ名	倉吉市文化財調査報告書
シリーズ番号	第104集
編著者名	岡平拓也・加藤誠司・岡本智則
編集機関	倉吉市教育委員会
所在地	〒682-8611　鳥取県倉吉市葵町722番地　TEL 0858-22-4419
発行年月日	西暦2000年３月21日

所収遺跡名	所在地	コード		北緯	東経	調査期間	調査面積	調査原因
		市町村：遺跡記号						
クズマ遺跡２次調査	倉吉市上神字クズマ	31203：4DKK・2		35°27′27″	133°47′36″	19990526～19991115	570㎡	個人の農地造成

所収遺跡名	種別	主な時代：主な遺構	主な遺物	特記事項
クズマ遺跡２次調査	集落 古墳	弥生：貯蔵穴　１基 古墳：古墳　１基 竪穴式住居　２棟 掘立柱建物　１棟 段状遺構　２ 古墳～奈良：溝状遺構　２ 柵列　２	土製動物形・手捏土器・土製紡錘車・土玉 弥生土器・土師器・須恵器・古代瓦 鉄鏃・鉄斧・管玉・臼玉・滑石製勾玉模造品 黒曜石剥片・碧玉製剥片・砥石・磨石・敲石・焼石	６世紀始めに造られた直径約14mの円墳周溝内に、７世紀後半以降、土製馬形・猪形、土師器甕、竈、土製支脚などが遺棄される。それらの内、甕・土製支脚が１ヵ所に集中して置かれたような状態で出土した。

クズマ遺跡第2次発掘調査報告書

平成12年3月21日　印刷
平成12年3月21日　発行

編集
発行　倉吉市教育委員会

印刷
製本　山本印刷株式会社